

---

# こちら炎を操りし相談屋

泉海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こちら炎を操りし相談屋

### 【Nコード】

N4169N

### 【作者名】

泉海斗

### 【あらすじ】

普通の高校生五十嵐紅也は炎術師である。しかもその力を使って相談屋を営んでいる。とある日同年代の女の子を預かることになった。彼女は茜といい、政略結婚が嫌で家出てきたらしい。しかもその家が日本最大の政治家一家桐崎家だった。彼女を取り返そうとする桐崎家の者たち。いやがる茜。紅也はそんな彼女を守れるのか？？

## 0 プロローグ（前書き）

書き終わったので投稿します。  
感想いただければ幸いです。

## 0 プロローグ

少年は今5・6人の不良たちと対峙している。不良たちは皆二十歳あたりだろうか？見た目から年上って感じがする感じが否めない。対する少年はどう見ても高校生。しかし、少年の服装は異様というほかになかった。彼の服装は顔の下半分を黒いマスクで隠し、さらに黒いコートを羽織っていたからだ。そしてなぜこんなことになってるのか……。それは彼ら不良たちが近くのコンビニやスーパーで盗みをしているため、彼らを『相談屋』が懲らしめにきていたからなのである。

「おいガキ！！何もんだ！！」金髪の不良Aが叫ぶ。しかし眉一つ動かさない少年。

「おんどれ～～何無視してるんじゃ～～！！」切れるパンチパーマの不良B。

「君たちが犯してきた犯罪に困ってる人たちが大勢いるんだ。僕は君たちを逮捕しに来た」透き通った声。その中にはしっかりと覚悟が込められている。

「逮捕～～～～？警察でもないガキが何できると思ってるんじゃ～～！！」ピアスをした不良C　が言う。

「兄貴～～どうします??」へらへら笑っている不良D　が兄貴と呼ばれる人物に尋ねる。

「・・・少年。ここは優しいお兄さんが見逃してあげるからここはさっさと家に帰ってママのご飯でも食べていたほうがいいよ」やさ

しそうに話すスキンヘッドの大男。しかし、ひるまない少年は1歩1歩不良たちに近づく。

「もう1度言うぞ少年「言いたいことはそれだけか??」「なに??という感じの表情の不良たち。」

「お前たちが言いたいことはそれだけかと聞いているんだカスが!!」はき捨てるかのような言葉。それが不良たちの怒

りに触れたようで兄貴らしきものを残して4人が襲い掛かってきた。4人は皆素手。少年は黒い手袋をかざす。すると・・・。

ごごごごご・・・少年の手のひらに巨大な炎の塊が浮いていた。マジックではない本物の炎・・・。不良たちはそれを見た瞬間腰を抜かして後ずさを始める。兄貴らしきものも顔が真っ青になっている。そして絞り出すかのように声を出す・・・。

「お前の名は一体??」

「お前ごときに名乗る必要はない・・・」

少年は炎を高く跳躍して不良たちに向かって投擲する。

どががががーん・・・・・・・・

煙であたりの視界が悪い。少年の眼には煙の晴れたそこに倒れた5人の不良が倒れていた。すぐに彼らに手錠をかけ、5人をまとめてロープで縛り上げる。そうしてようやく少年の仕事は一段楽するのである。最後に警察に明け渡せば終了。そうして5分後、警察がパトカーに乗ってやってきた。中から出てきたのはがっしりとした中年の男性だった。それに続くのは部下だろう。縛られた不良が意識を取り戻したところで続いてきた搬送者に乗せていく。少年に近づく、中年の男性。

「今回も君に助けられた。ほんとうにありがとうございます」

「いいんです。ちゃんと報酬がもらえれば俺はそれに見合った仕事はします」

「わかってるよ。まったく。ほれ、これが今回の報酬だ。10万円ちゃんとあるから心配するな」

「ありがとうございます。天草警部」

「何を言ってる。次も頼むよ、相談屋コードネーム『焰』」

焰という少年は夕暮れに照らされる町を後にしていた。

## 0 プロローグ（後書き）

コメント待ってます!!

## 1 偶然??の出会い

少年は夕日で茜色に染まる坂を歩いていた。紅桜学園高等学校の制服姿だ。彼の名前は五十嵐紅也<sup>いがりこうや</sup>。紅桜学園高等学校2年生だ。彼は友達の手伝いとして相談屋を営んでいる。

『相談屋』　さまざまな相談事をそれに見合った報酬で解決するという仕事をしている。彼もまた相談屋の仕事の第1線で活躍している。両親が旅行好きで年に2・3日しかいなく、1年の双子の妹と弟と4人で暮らしていた。もちろん食事は紅也が作っていた。

「今日の仕事の報酬で何とか3ヶ月は持つかな」

家計のこともしつかりと考えている。まるで主夫である。そんな紅也の前方ではなにやらナンパが行われていた。桜色のショートヘアの女の子だった。見た感じ同年って感じ。背は150後半。スタイルは平均的。そんなことよりもその女の子は嫌がっていた。

「おいおいねーちゃん。俺達と遊ばない??」

大学生らしき男が女の子の腕をつかむ。女の子は強く引かれたためかきゅんと悲鳴を上げる。それをニヤニヤと笑っているほかの2人の学生。

（まったく・・・、大声上げればいいものを・・・）

疲れた体で、早く夕食を作らなければいけないのにまさかの状況に出会ってしまった紅也。はあっとため息をつく。そうしてゆつくりとそのナンパ集団に近づく。



「そんなにいやがるなよ。俺達そんなにひどいことはしないからさ」

「そうそう、ちょっとそのレストランで話ができればいいんだから」

下心丸出しの目つきで言い寄る学生。必死に嫌がる女の子だが、如何せん、体の差が大きすぎた。

「おい、その請いやがってるだろ?? 離してやれよ」

1人の学生の方に手を乗せて話す紅也。

「ああ?? 誰だてめえ?? 関係ないだろ??」

「そうそう、あっち行った行った」

「女の子が嫌がってるのを見過ごすわけには行かないな」

「高校生がいきがるんじゃないぞ!!」

頭に血が上っているのか、とうとう切れてしまった学生たち。顔が不細工になってますよ。なんてことはいえないので無視する紅也。

「オメエ、ちょっと痛い目に遭わなきゃわからねえらしいな」

手をバキバキと鳴らす学生。どうやら格闘系のスポーツをしているのだろ。ほかのやつよりは筋肉の付が違っていた。しかしそんなことは相談屋の彼には関係なかった。

「くたばれ!!」

3人が一気に殴りかかってきた。それを軽くかわす紅也。拳銃の弾丸をかわすのも容易な彼にとってパンチなど止まって見える。かわしては人間の急所に的確に攻撃してじわじわといったぶる。それによつて後で一気にダメージが来るのである。

「くぐあゝゝ」

あまりの痛みに悲鳴を上げる学生たち。彼らを見下ろして紅也は吐き捨てる。

「手前ら・・・2度とこの子に近づくんじゃねえぞ!!」

「すいませんでした」

なんとも情けない声をあげて逃げていった。その場に残ったのは紅也と女の子だけだった。女の子はおずおずしながらも逃げていく学生たちを見る紅也に話しかける。

「あ・・・あの」

透通ったソプラノの声に反応する紅也。顔を真っ赤にした女の子がうつむいていた。もじもじしているのがなんともかわいい。

「もう安心してください。あいつらはもうあなたには近づきませんよ」

につこりと笑いながら話す紅也。さらに女の子は真っ赤になる。

「あ・・・あの、助けけてくれてありがとう。いきなりだったからど

うすればいいのか分からなくなっちゃって……。  
あなたが来なかったら私今頃どうなってたか……」

災厄のパターンを考えてしまったのだろう。彼女はいきなり泣き出してしまふ。どうすればいいのか分からない紅也はあたふたとするばかり。

「ああ……つと……ええつと……。こんなときどうすればいいのか分からないけれど……。また何かあったら連絡して。俺こんなのやってるから」

そう言つて女の子に名刺とハンカチを渡す。女の子はハンカチで涙をぬぐいつつ、名刺を見る。

「相談屋?？」

彼女はなんだこれは??という顔をしている。それは当然だと言つ顔を紅也はしている。

「相談に応じたお金を払ってくればそれを解決するという仕事だよ。いろんな相談を受けるんだ」

笑いながら話す紅也。

「俺はまだまだ下っ端だけれどもね」

ここは苦笑いしながら言う。女の子はじつと名刺を見ている。ふと腕時計を見るとすでに6時30分を過ぎており、周りは日が落ちて街灯が点灯していた。ご飯を作らなければいけない時間だった。したの3人はご飯にうるさく、部活もしているのでいつもおなかをす

かせて帰ってくるのだ。それにご飯が間に合わなければ、きついお仕置きが待っているからなおさら遅れられないのだ。

「ごめん。俺後帰らなきゃいけないから。何かあったら連絡頂戴ね」  
そう言い残して紅也は走って行つた。少女は紅也の後姿を見つめていた。

次の日の朝、いつものように紅也は朝食を作っていた。そこに下の3人の妹と弟が起きてきた。

「アニキーおはよう。ごはんは??」

長女の五十嵐楓。バスケット部所属で1年生ながらレギュラーである。兄に対する態度がどうしても大きい。彼氏がいるのになぜか料理が苦手。だからいつもデートで弁当を作るのは紅也に決まっていた。

「お兄ちゃん、おはようございます」

次女の五十嵐梓。吹奏楽部所属で1年生。吹奏楽は紅桜学園高等学校の部活の中でももっとも優秀な成績を収めており、つい先日の大会でも最優秀賞をとっていた。彼女も出場して個人賞もとった。

「兄ちゃんおっは」

まったく古い言い回しで起きてきたのは次男の五十嵐輝。同じく1年生で野球部に入っている。中学まではリトルリーグで投手兼4番を任せられていた。高校でも活躍中である。

そんなすごい兄弟を持った長男が五十嵐紅也。部活には入らずに4

人をまかなうためにアルバイトと相談屋をやっている。いつも傷だらけの兄に3人はいつも心配していた。声をかけても大丈夫の一点張り、中学のときは骨折して帰ってくるということもあり、そのときは相談屋をやめるようにいった。

しかし紅也は聞かずにそのまま今日まで続けている。そのため、兄弟3人はお金については文句を言ったことはない。なぜこんなにも大変な生活（相談屋で大金が入るのでそれほど貧しいというわけではない）をしているのかには大きな、そして悲しい理由があった。

それは・・・親がいないということだ。両親を亡くしたのではない・・・捨てられたのだった。

紅也が5歳のとき、眠っている紅也たちを家に置いたまま両親が物をすべて持って夜逃げしたのだった。彼らに残ったのは両親が仕事の失敗とギャンブルで溜め込んだ億単位の借金だった。

来る日も来る日も取り立て屋に脅かされる毎日。知り合いもいなければ、友達もいなかった。そんなある日、こっそりと外に出ていた紅也はパン屋から残ったパン耳をもらいに行っていた。

その帰り道、ふと道端できれいな女性から紙をもらった。黒いコートを着ていたので誰かは分からなかったが、甘い香りと、胸のふくらみを見て女性だと確信した。その紙のは『相談屋』についてのことが書かれていた。電話は運よく残っていた10円玉で操作し、相談屋に電話した。

その日の夜、決まってやってきた取立て屋をその女性が倒して、紅也たちを救ってくれたのだった。その後、その女性の家にお世話になることになり、女性から紅也は戦いの基礎を教え込まれた。きつ

かった。泣きたかった。逃げ出したかった。

でもそれでは小さな妹、弟たちを親と同じく捨てることになってしまふ。それだけは嫌だった。親のようにはなりたくなかった。だから必死に頑張った。

いつしか自分も一緒に仕事をするようになった。お金もそのときからもらうようになり、警察とも知り合いになった。そのときから自らが炎術士として目覚めたことを知ったのは。始めは自分が怖かった。みなに嫌われるのではと・・・。

しかし女性も警察も、そして妹たちもそんな俺を嫌わなかった。むしろ女性は喜んでいた。自分の生徒が1人立ちすることを喜んでいたのであった。

その日から、極秘任務にも参加するようになり、不良たちを捕まえたり、殺人事件の解決に協力したり。時には外国にも行ったりした。そのおかげで外国語はほとんど話せるようになった。

「おはよう3人とも、ご飯はもうできてるから、顔洗ってから食べるんだよ」

そうして今日も1日が始まった。

きーん こーん かーん こーん

ホームルームが始まる鐘が鳴った。紅也は窓ぎはの後ろから2番目のところに座っていた。どうやら今日は転校生が来るようで、そのことで話が盛り上がっていた。特に男子はかわいい女の子だと言ふことで盛り上がりは尋常ではなかった。先生が入ってきた。田村

茂。数学の先生。すらりと背が高く、イケメン。女子からの人気が高い。彼女持ちの男子も嫉妬するほどである。

「えゝ、今日はみなが知つてるとおり、転校生を紹介する。入ってきなさい」

田村が言うのとゆつくりとドアが開き、転校生が入ってきた。紅也は興味なさそうに外を見ていた。しかし『おー!!』という生徒たちの歓声に思わず振り向いてしまった。

「!!」

目を疑った。自らの目に移る女の子が・・・この前助けた娘だったからだ。思わず立ち上がってしまう。

ガタツ!!

その音にクラスの全員が紅也に視線を移す。

「どうした紅也??まさか桐崎茜さんと知り合いか??」

声が出ない。それもそのはず無意識のうちに驚いて立ってしまったのだから。

「ええ・・・あのゝ・・・そのゝ」

もごもごと彼らしくない表現に、友達の栗野新平が冷やかす。

「せんせゝ、まさか紅也が女の子と知り合いのわけないでしょ!!」

それに便乗する仲間もいる。

「そうそう、紅也は女の子恐怖症だからね」

中学時代からの親友柴崎優だ。

「もったいないよね、顔は嫉妬するくらいいいのに」

幼馴染の橋場卓也だ。そのほかにも言いたいことを言われて顔を真っ赤にする紅也。

「みんな言いすぎだよ（怒）紅<sup>あか</sup>ちゃんはすごく優しいんだから！  
！（えっへん）」

「何だ、椎名？？前から思ってたんだけどさ。紅也とはできてるの??」

恋愛ものには敏感な川井信吾が口を挟む。

「わわわたしは紅ちゃんとはまだ幼馴染であって・・・そんな関係ではないけど・・・そんな関係にはなりたいと思ってる・・・（ボン！！）」

『きゃー、椎名、顔真っ赤。可愛い』

女の子に冷やかされる椎名。その横で真っ赤なまま固まっている紅也。なにが起きているのかわからず突っ立っている茜。そこに・・・。

「君のその可憐な容姿に心を射止められました？僕と付き合ってく



ださい!!」

いきなり転校生に告白しているのはキザな樽川徹だった。突然のとだったので顔を真っ赤にしてうつむくアカネだったが。

「ごめんなさい・・・」

「の～ん!!」

見事に撃沈する徹。

「また徹のやつ告白してやがる・・・」

「あいつのうち金持ちだからって、むかつくよな・・・」

「でもあいつ悪いやつではないからな・・・」

「憎めないんだな」これが・・・」

クラスメイトが徹について駄弁る。

「はいはい、静かに!!こちらにはかの有名な政治家桐崎重喜代さんの娘さんの桐崎茜さんだ。みんな、よろしくやってくれ!!」

『はい』

クラスメイトが一齐に言う。茜は嬉しそうに笑った。

「桐崎の席は五十嵐の前だな」

ざざざつとクラスの男子が紅也を睨む。

『何でお前ばかり・・・』

こう見えても紅也はもてる。しかし女を前にするとたんにしおらしくなってしまうため、ドSの女性には格好の餌食なのだ。このように女性恐怖症になってしまったのもドSの女の子との付き合いが原因だった。（妹は大丈夫なのだが・・・）

その日は茜の周りにはたくさんの人ばかりができた。みんなは茜が政治家の娘だということは関係なく付き合っているのだ。それが彼女にとっても嬉しいのだろう、はじける笑顔が男子のハートを射止めていた。そんなこんなで放課後。

紅也は生徒会室に呼ばれていた。

が　　ら　　が　　ら

ドアを開けるとそこには髪の毛の長い女子生徒がいた。

「桜井先輩、今度はなんですか??」

生徒会長　桜井　千尋。　警察庁トップ幹部の父を持つ、正義感が強い女子生徒だ。紅也はこうして彼女が父親からもらってきた情報を提供して、彼に仕事を与えているのだった。

「最近は何騒な事件が多いのでそれらの手伝いをつと思つてたんだが・・・急ぎの仕事だ・・・」

突然彼女の声が変わったので紅也の疲れてねむそうだった目が引き

締まった。

「重要度は??」

声が低くなる、仕事になると、いつもはきはきはした声が残酷さを伴った低い声となるのだ。彼は2重人格だった。

「レベルS」

「どんな内容だ??」

「・・・このグループからとある誓約書を奪ってきてくれないか??」

「どんな内容のものだ??」

「今度建てられる会社があるでしょ??あれ・・・表向きは貿易のためのものらしいけれど、裏では麻薬や違法なものが取引するためにものらしいわ・・・ここ、海に面してるから密輸が絶えないのよ・・・だからそんなやつらが集まるような建物が私のいるところに建てられては虫唾が走る。だから急ぎの仕事であれを止めるために誓約書を奪ってきてくれないか??」

「それはいつ取引される??」

「情報では深夜零時ね」

「了解した・・・。それと見返りは「私の体」・・・いくらだ??」「だから私の」だから金額はいくら払ってくれるのかって聞いているんだ!!」

「つれないわね、しょうがない・・・10万でどう?..」

「それだけあれば・・・2・3ヶ月はもつ」

「弟・妹思いなのね・・・」

「当然だ・・・。あいつらには俺とは違って幸せになってほしい」

「あなたはいいの?..」

「俺は・・・」

「あなただつて人間よ?? 幸せにならなくちゃ・・・」

「まずはあいつらの幸せが大切だ・・・。俺のはその後でいい・・・」

「

「私はいつでもいいのよ」

「俺がこんなになつたのはお前らのせいなんだからな・・・」

「照れちゃつて。かわいい」

「・・・うるさい」

「まあ、死なないように幸運を願ってるわ」

「ああ・・・」

そう言い残して紅也は生徒会室を出て行った。

# 1 偶然??の出会い（後書き）

コメント待ってます!!

## 2 進入くまさかのつながりく

紅也は結構時間に間に合うように今回の取引がなされるとあるバーに来ていた。現在23時55分そろそろ突撃の時間が近づいていた。妹たちが寝静まったところを見計らって出てきた。余計な心配はさせたくないからだった。

「さてと・・・行くか」

紅也は仕事モードとなり、バーのドアを蹴破る。

バーン！！

ものすごい音に反応して中にいた男たちが振り向く。中には強そうな奴もいた。

「相談屋だ・・・。おとなしくその誓約書を渡してもらおう」

「なんなんだお前は！！ここは子供の来るところじゃないぞ！！」

「そんなのは関係ない・・・。さっさと誓約書を渡せ」

「ボス・・・こいつはうわさの相談屋です。やばいらしいですよ・・・」

「バカ！！せつかく金儲けができるというのにみすみすこの計画を破棄するわけにはいかない」

「中丸士朗さんですね・・・。あなたの情報はすべてこちらで抑え

ています。これを公開すればあなたの権威はガタ落ちですね」

「な・・・」

「あなたが経営している会社・・・潰れますよ??全部」

「ふざけるな!!俺がどれだけ汗水流して頑張ってきたのか分かるか!!」

「わからねえ・・・」

「は??」

「なんでここまで積み重ねてきたものを一気にぶち壊すようなまねをするんだ!!」

「これがさらに金になるからだ!!」

「ばれなきゃなんでもいいのか??そう言っただけの反動はでかいんだぞ??お前は社員に一生の傷を負わせるつもりか??」

「な・・・つくつく」

「何がおかしい!!」

「はーっはっはっは、坊ちゃんには分からないだろうね。この世は金と権力だ!!権力があればそれでつぶすこともできる!!」

「馬鹿が!!国家に勝てるわけ・・・」



「それができるんだよね。ひっひっひっひ」

ざっざっざ

黒ずくめの男たちが紅也を囲む。どうやら奥にいる和服姿の男のものだろう。ボディーガードたちが戦闘体制に入る。

「ここまで腐つてるとはな・・・」

「お前はここで死ぬ・・・そして制約は受理される!!」

「なんならお前の腐った根性を誓約書後と焼ききってやるよ!!」

じじじじじ・・・

紅也の手には炎の塊があった。それを見て思わずたじろぐ男たち。

「やけどしてもしらねえぞ!!」

紅也は炎をこぶしに纏わせ・・・こぶしを地面にたたきつける。すると男たちの足元から炎が飛び出す。それらが男たちのあごを殴り、ノックアウトさせる。

「Flower <sup>ほの</sup>dance <sup>はな</sup>of <sup>ダンス</sup>flame」

「な!!」

「これで終わりだ!!金と権力におぼれた豚が!!」

そう言い捨てて紅也は炎の剣を作り出す。

「悪の誓約が書かれしものよ・・・わが炎で滅されるべし!!」

「One <sup>じょうか</sup> sword <sup>の</sup> cutting <sup>いっとう</sup> of <sup>りょう</sup> purification <sup>だ</sup>  
tion in two」

誓約書が剣によつて灰となった。あまりの恐ろしさに社長のほうは泡を吹いて気絶していた。しかし奥の和服男はただ目をつぶり座っていた。紅也は男の姿を隠していたカメラで納めるとその場を立ち去ろうとした。

「少年・・・」

男が口を開いた。なんとも威厳のありそうな声だ。

「なんだ・・・」

紺屋も低く、殺気をこめた声で答える。

「なぜ私を倒そうとしない??」

「あんたに関する情報がないからな・・・。一般人は巻き込まない主義なんで」

「だからカメラで納めたのか??」

「!!」

気づかれたことに動揺した。完璧に隠し撮ったつもりだったものを・・・。

「まさかと言う顔をしているな。まあいい・・・いずれまた会うことがあるだろう」

「あんたは何を考えているか分からないが・・・あまり破滅の道を行くと・・・すべてを失うぜ」

「忠告ありがとう」

男は裏のドアから去っていった。

翌日、朝早くから紅也は生徒会室に来ていた。昨日のことを報告するためだ。

「よくやってくれたわね。ありがとう紅ちゃん」

「それはやめてくれ・・・」

「いいじゃない、紅ちゃんはかわいいんだから」

「それで、やつの正体は分かったのか??」

「ええ、なんとも厄介なやつよ」

「誰なんだ??」

「日本きつての権力の持ち主　政治家　桐崎重喜代。その娘がここの学校に来ているわ」

それを聞いて紅也は昨日の転校生のことを思い出した。

「まさか・・・昨日の転校生・・・」

敵の仲間が案外近くにいたことに驚く紅也。

「ええ、きつとあの子が娘さんね。気をつけたほうがいいかも」

目を細めて言う千尋。手にあごを乗せて考えているということはまだ詳しく分からないのだろう。

「まあ、本性が分かるまでは普通に接しておく」

こうするほかないという表情で話す紅也。

「そうね、それがいいかもしれないわ」

現時点では何も無いと吹っ切れる千尋。

「それより報酬をよこせ」

きつと目を千尋に向ける。

「そんなにせかさないでよ。仕事になるとすぐにそうなっちゃうんだから。でもそのギャップがまたたまらないわね」

指を唇につけてにっこりと笑う千尋。ふざけてないでっとなとよこせとせかす紅也。

「変なことを・・・」

途中で紅也の声が切れた。なぜなら紅也は千尋のキスされていたか

らだ。ただされるがままに……。舌と舌が絡みつく。こうなればもう紅也はどうしようもない。

「千尋……やめろ……」

嫌そうにいうものの抵抗は無く、受け入れる。それに便乗し、千尋はさらに激しく舌を動かす。しかし紅也もちからで何とか体をどかす。

「つれないわね。あなたのファーストキスは私が当の昔にもらって、これするのももう10年でしょ??そろそろ慣れなさいよ」

「う……るさい」

力が抜けたのか、紅也はその場に座り込んでしまう。

「まったく、今日はここまでにしてあげる。でもあなたの初めてはすべて私がもらっちゃうからね」

「勝手にしろ……」

千尋が出て行った生徒会室に1人残される紅也だった。

## 2 進入くまさかのつながりく（後書き）

コメント待ってます!!

### 3 淡い彼女の願い

例の事件を解決してから早1週間。焼ききった誓約書のレプリカを千尋に渡した。その後キスをまたまた受け、ふらふらになりながらも家に帰った。リビングには妹たちと見知った女性がいた。

「篝さん・・・」

篝 文恵・・・紅也に炎術士としての基礎と相談屋の仕事を叩き込んだ人物であり、彼女自身も炎術士である。それもトップレベルの・・・。

「やあ紅ちゃん。元気だった?？」

飄々と挨拶してくる。紅也もまったくため息をつきながらも。

「ぼちぼちです。仕事もうまくいってますから」

「そつえばこの前レベルSの仕事を請けたらしいじゃない??またあの愛しのあの子のためかな??」

「何言ってるんですか!!篝さん!!」

けらけら炉笑う篝と顔を真っ赤にして反論する紅也。それを見てまた笑う妹たち。まるで家族のような瞬間だった。

「それでまたあんたに仕事を依頼したいんだけどもさ・・・」  
突然真剣な口調になったため、紅也も目を細める。雰囲気を感じたのか、妹たちは静かになる。

「この写真の女子高生をかくまって欲しいんだ・・・」

すつと手元に出された写真に載せられていた女の子には見覚えがあった。

「この子・・・転校生の子だな」

仕事モードの口調になる。片手に持ってみる紅也を見ながら腕を組んで箸は続ける。

「この子からつい最近電話が着てね・・・。なんでも結婚することになったらしいのよ」

「高校生なのにな?」

長女の楓が驚きの声をあげる。

「高校生でも女性は16歳から結婚できるだろ?」

「そうだね」

紅也の答えに納得する楓。

「でもなぜ結婚するのに、相談屋に連絡を??」

怪訝そうな顔の紅也にタバコを口にくわえながら箸が答える。

「彼女の結婚は政略結婚だ。彼女は望まない結婚相手と無理やり結婚させられるんだ。女性としてこれほど悔しいことはないだろう。」



だから彼女は私のところに電話をしてきた。彼女の身元からあんたが適任だと私は思ったのさ」

すはーっと煙を吐き出しながら言う篤。彼女の目には悲しみが含まれていた。

「彼女には俺のことを言ったのか??」

「ええ、一応は言ったわよ。別に嫌がられることはなかったし。むしろ好意的だったかしらね」

「アニキ!!とうとうアニキにも春が来たんじゃないかねえか??」

はしゃぐ楓。あまりにうるさいので膝の上に乗せる。嫌がっていたが頭を撫でるとふにやっとおとなしくなった。次女の梓はうらやましそうに見ていた。

「女の子なら俺はオツケーだぜ!!」

輝がわくわくしながら言う。楓も梓も受け入れ態勢でいる。ここで彼女たちの期待を裏切れば大変なことになりそうだった。そこで・・。

「仕方ねえ、その用件、お受けいたします」

「それはよかった。お前ならやってくれると信じていたよ」

真剣な表情の紅也とニコニコな表情の篤。

「ところで重要度は??」

「言いにくいんだけれどね・・・レベル・オーバーよ」

「な・・・なんだと・・・」

ご愁傷様という表情の篝と愕然とする紅也。

「お前には本当に悪いと思っている。でもな、彼女を助けられるにはお前しかいないんだ!!」

「レベル・オーバーだなんて・・・かつてこんなことがありましたか??」

「あつたよ・・・」

「一体??」

「今は言えない・・・機密事項だからな・・・」

「そうか・・・」

「すまない。それでは明日の朝にでも彼女の荷物がすべて届くだろう。これだけ広い家なんだ。部屋はあるんだろ??」

「いくらでもありますよ。相談屋で稼いだ金は馬鹿にできませんからね」

「この言えはお前の努力の結晶さ」

「ありがとうございます」

「アニキ・・・あり・・・がとな。いつも頑張ってくれて・・・」

顔を真つ赤にしながら普段素直ではない楓が感謝の言葉を言う。

「お兄ちゃん、わたしたちは幸せです。だからおにいちゃんも幸せになってください」

礼儀正しく感謝を言う梓。慣れているな〜と感じられる。

「兄ちゃん、サンキューな。俺も頑張るからよ」

にししと笑いながら言う輝。

「新しい家族が増えるんだ、盛大にもてなすぞ!」

仕事モードで仕切る紅也についていく妹たち。

「家族か・・・」

篝はそんな彼らをうらやましそうに見ていた。

### 3 淡い彼女の願い（後書き）

コメント待ってます!!

#### 4 ようこそ炎術士の家に

翌朝になると家に前にはたくさんの荷物が来ていた。

「これは一体どれだけのお嬢様なんだあいつは・・・」

あまりの荷物の多さに絶句してしまう紅也。妹たちもあきれていた。そこに車がやってきた。

「おはようございます、篝さん」

仕事モードとなり低い声で挨拶する紅也。妹たちもいつも見ているようだが、なかなか鳴れないものである。2重人格には。

「おはよう紅也、楓、梓、輝。相談者を連れてきたぞ。よろしくしてやってくれ」

車から現れたのは真っ白なワンピースを着た茜だった。

「おゝ、きれいな人だね。あんな人が兄ちゃんのクラスメート？ いいな」

「輝静かにしろ・・・」

仕事モードの紅也には世間話は通用しないのである。むしろ邪険にされるのがオチである。

「あつはっは、相変わらず仕事になるとそれにしか意識できないんだね。紅也」

「からかつてるんですか?? 篝さん」

「そんなことはない。むしろそんなことができるのはほとんどないから私はむしろ評価するよ」

「それで??これから彼女にここでの暮らしを説明すればいいんですか??」

「そういうこと、じゃあ私はこれで。後はよろしく頼むよ」

「了解」

それを聞くと葉と笑いながら車で去っていった。茜は居候先が意外と大きかったことに驚いていた。

「やつほ、こんにちは。私は五十嵐楓。楓って呼んでね」

「私は桐崎茜。よろしくね」

「茜姉ちゃん・・・アネキでいいか??」

「アネキ??くす。いいよ」

「よっしゃー、アネキができたぜー」

なんだか嬉しそうのはしゃぐ楓。それをほほえましく見ていると茜の傍に梓がやってきた。

「五十嵐梓です。梓と呼んでください。私はお姉ちゃんと呼びますので。よろしく願いします」

「よろしくね。梓ちゃん」

にこりと笑い、梓は家の中に入っっていた。

「おはよう、姉ちゃん。俺は五十嵐輝。よろしくな!」

「よろしくね、輝くん」

「姉ちゃん、きっと兄ちゃんの子と気に入るよ」

「え??? どういうこと??」

「いずれ分かるさ」

ニヤニヤしながら輝は家の中に入っていた。茜もそれにならって家に入る。荷物はすでに紅也がすべて中に入れていた。炎術士としての体も鍛えていたからお手の物だった。

「ありがとうね、五十嵐くん。これから色々迷惑かけるかもしれないけれどよろしくね」

「ああ、こちらこそ妹たちが何かと世話になるかもしれないが、よろしく」

仕事モードの紅也に会うのは初めてだった。前は学校で挙動不振になった紅也しか見ていなかったのであまりの変貌に驚いている。

「気にしなくてもいい。俺2重人格だから」

「うん・・・」

こうして、茜の炎術士の家での逃亡生活が始まった。



#### 4 ようこそ炎術士の家に（後書き）

コメント待ってます!!

## 5 体育祭で

5月上旬、桜学園高等学校では1週間後に体育祭が企画されていた。現在はロングホームルームを使って出場する種目を決めていた。

「はいはい、これから種目を決めて生きたいと思いますーす」

前で仕切っているのはクラスの委員長中州留美子。なかす るみこ責任感が強く、体育祭の実行委員長でもある。黒板の前には書記として茜が立っていた。何でも一番時がうまくいからと言うことだった。

順調に種目が決められていく。皆々やりたい種目を選ぶ。紅也はリレーと3000メートル走を選んだ。そんな中で一番楽しんでいたのは茜だった。何でもこのようにみんなで大きな行事をしたことが無かったらしい。みんなはしゃぐ茜にはじめはびっくりしていたが、経緯を理解すると彼らもテンションが上がっていた。めったにないクラスの一体感を感じることができた。担任も嬉しそうだった。

「それではこれにて種目の決定を終わりたいと思います。お疲れ様でした」

『おつかれした』

その後は思い思いに会話を始める。中に話し始める生徒もいれば、まじめに勉強し始める生徒もいた。物静かに本を読み始める茜に仕事モードの紅也が声をかける。

「ずいぶん楽しそうだったな。中学まではこんな風なこと無かったのか??」

「うん、私の通ってた学校はいつも勉強と作法ばかり。立派な人間になるためには遊んでいる暇はないといわれていたからね。こんなに楽しいと思っただのはいつ以来かな」

哀愁を漂わせて言う茜の顔には喜びがにじんでいた。

「本番はもつと楽しくなる。お前もクラスに貢献できるようにせいぜい頑張るんだな」

「五十嵐くんはスポーツ得意なの??」

突然紅也の背中に黒い影が現れた。茜は突然のことにひつと悲鳴を小さくあげる。紅也は俊足で蒼手の胸倉をつかむ。そこにいたのは・・・。

「紅ちゃん・・・ギブ!!ギブ!!」

加藤椎名が苦しそうに言っていた。そして紅也は自分が今何をつかんでいるのかをようやく理解した。なにかむにゅっとやわらかい感触がした。これは・・・。

「紅ちゃん・・・」

椎名の胸だった。ただでさえ平均よりもある椎名。それをわしずかみされたとするとお決まりの・・・。

「紅ちゃんのエッチー!!」

高速で放たれるびんたをもろに受けそれでも1歩も動かない紅也。

しかし茫然自失していた。すでに通常モードに戻っているのだ。

『紅也く???』

クラスの男子が紅也のことを尋問し始めた。女子は女子で椎名のことを慰めたり、よかったねと賛辞を送っていた。それを複雑そうに茜は見ていた……。

そして体育祭当日、天気も快晴に恵まれた。五十嵐家では朝から大騒ぎだった。

「アニキ、おにぎりには肉巻いてな」

運動量が多い楓は食べる量も多い。紅也のおにぎりの中では肉巻きが大好物なのだ。茜は隣で黙々と料理を続ける紅也を見ていた。

「五十嵐君は料理上手よね。わたしはみんな作ってもらってたからまったくできないんだよね」

なんだかうらやましそうに見ている茜を見て紅也は。

「それなら作ってみる??」

おにぎりを見せて言う。茜は最初は戸惑っていたが、すぐにやるといつて手ほどきを受けた。そして数分後、ようやくうまく形作ることに成功した。何度も失敗したが、めげずにやるのはお嬢様のプライドが許さないそうだ。

「やった」

紅也と茜は抱き合つて喜んだ。それを近くで3人にジーっと見られていることにしばらくして気づいたため、あわててはなれて紅也は再び料理に取り掛かり、茜は真っ赤になって部屋に着替えに行った。しばらくの間、3人はにやにやをやめずに紅也に早くくつつけと矢次にせかす言葉を送っていた。

体育祭は開会式を通して各競技場所で行われた。紅也は種目が最後だったため、友達の応援をして回っていた。ふと見てみると茜が高跳びを行っていた。結構な記録を出していたため残っているのは茜を除いてそれを部活で行っている生徒だけだった。

茜の表情を見てみるとはじける笑顔を回りに振りまきながら競技に没頭している。次々と記録をたたき出す彼女に周りの生徒たちは歓声を送っていた。そして彼女はそれに丁寧に答えていた。転校して数週間だがもう隠れファンクラブができていた。

「これは同棲していることがばれたら大変だな」

「あら、誰が誰と同棲しているのかしら??」

「おわ!!」

突然気配も鳴く声をかけられたので驚いてしまふ紅也。後ろを向くとそこには……。

「千尋か……」

仕事モードで名前を呼ぶ。目は据わっていた。

「その鋭い目は私を続々させてくれるわ。そのめをどうやって屈服

させるか……。楽しみね」

「何が楽しみなんだ……。俺はそれでも仕事なんだ」

「あら、あなたが仕事モードで気配に気づかないなんて珍しい」

「お前を気配読んで見つけたことが俺にあったか??」

「無かったわね」

につこりと笑いながら腕に抱きついてくる千尋。学校でも人気の生徒会長が男とラブラブしているところを見せられると男生徒たちはいつせいに紅也を睨みつける。仕事とはまた別の殺気を感じている。

「それにしてもあなたもまた大きな仕事を請けたもんね。私だったら無視しちゃうかも」

「そうは言ってられない……。この前のお前の1件と関係している家柄の人なんだから。それに家出てきたんだから血眼になって探してるだろうな」

「そうね、彼女がもし捕まったらどうするの??」

「そのときは助けに行く」

「仕事だから??」

「仕事だから……。なのか??」

「あら……。あなたの心にまた別の女が入り込んでみるようなね。あ

の子があなたと同棲しているのね??」

「ああ、想像通りさ」

「これはちよつと不利かしらね」

「まったくこんなときにその話はやめてくれ。それならば俺のいないところで女同士でやってくれ」

「あなたをめぐつての戦いなよ??」

「俺は賞品か??」

「あなたは賞品よ」

「なんだか軽く落ち込む」

「まあ、私のものになれば玩具になっちゃうかもしれないわね」

「それは考えただけでも怖いな」

「あら、そんなあなたもいいかもね。仕事行くときは私と対等なのに、帰ってくると「ストップ!」なんですよ」

「周りからものすごい殺気を感じるんだ」

「それはあなたのせいでしょう??」

「お前が俺を巻き込んでなんかおかしい想像を言ってるからだよ」

「まあいいわ、また後出会いましょう。また仕事が入ってるから」

「分かった・・・」

「それじゃ」

そう言つて千尋は生徒たちの群れの中に消えていった。すでに高飛びは終わつてたらしく、お昼になっていた。紅也のことを待つていた茜。どうやらすべて聞いていたようで少し暗かった。

「どうした??体調が悪いなら言つてくれよ??」

「大丈夫よ・・・」

「そうか??ならいいんだが。なら妹たちのところに行こう。昼飯だ」

「そうね」

お昼は千尋や椎名を巻き込んで美味しくいただいた。昼休みは長いために休んでいる生徒が多かった。茜と紅也は常に1組となつて行動していた。いつ襲われるか分からないからだ。

「ご飯美味しかったよ。また私にもできるやつ教えてよ」

「ああ、かまわない」

「仕事モードでしゃべらなくてもいいんだよ」



「これはもう癖だからな」

「それなら直していこうよ」

「それは・・・」

紅也の言葉が途中で切れた。茜もすぐに紅也の後ろに隠れた。彼らの目の前に黒尽くめの男たちが現れたのである。一目見ただけで敵だというのを感じ取った紅也はすぐに戦闘体勢になる。男たちもこぶしを構える。さすがに学校で発砲はできないらしい。そして後ろの黒い車の奥の席にはいつぞやの和服男が座っていた。

「お父様・・・」

茜が泣きそうな顔に恐怖をあらわにしていた。この状態はやばいと紅也は急いで逃走を開始する。それを追いかけてくる男たち。茜を競技場の妹たちのところに行くようお願いし、己は再び舞い戻る。最後に茜が何か行っただがはつきりとは聞こえなかった。ただ・・・。

『・・・ないで』

それだけは聞こえた。紅也は深くは考えずに、すぐに黒のロングコートに着替え、サングラス、マスクを装着した。男たちは紅也を5・6人で囲む。どれも鍛えられていることを感じさせる。しかし紅也はひるまずに手に炎を浮かばせる。そして男たちのどこから汗が地面に落ちた瞬間、戦闘が始まった。

男たちはフットワークを使いヒットアンドアウェイを繰り返す。紅也は一撃必殺が多いため散り散りになられると困る。だからといってそれようなものが無いわけでもないのだが・・・。

ずっと両腕を空に向ける紅也。そして答える！！

「メルトダウンー！！」

小さな男たちを囲むぐらいのドーム上のものが出来上がった。男たちは逃げられないことに焦り始める。そして……。最後は温度が急激に上がり脱水症状でミイラに近い状態になる男たち。紅也自身もふらふらである。それでも怪力を発揮して男たちを男の乗っている車まで持つていく。

「殺さずに返すのか??」

男は目を開けずに質問する。

「ああ、殺すことは基本的商売ではないのでね。やばいときは殺す」

目も見ずに振り向きざまに言う。

「茜は・・・なぜ私から逃げるのだ?? 桐崎家の仕来り上、結婚相手の条件は決まっておるのに・・・」

「結婚手のはあんたらが勝手に決めるものではないだろ」

「それは一般の凡人どもの場合だ。我々のような人間は仕来りに従うことが更なる発展につながることを知っている」

「だからといってあいつの幸せを壊していいのか??」

「なんでも手に入るのに何が幸せを壊すだ……。何を言ってるの

だ火遊び少年」

「金持ちボンボン親父にはわからねえだろうな……。俺のように金が無いことで不自由な生活しかできないやつらがこの世界にたくさんいることを」

「私たちにとって関係のないことだよ」

「あいつだって凡人さ。凡人以下の俺が言うのもなんだけれどさ」

「お前は桐崎家を侮辱するのかね??」

静かな口調の裏には怒りがこめられていた。

「別に。でも料理もできない女の子が結婚してどうなる??作らせるからいいなんて考えてるんじゃないだろうな!!あいつだって普通の女の子だ!!自分で見つけた恋はしたいと思うはずだ!!それをお前のような腐った金持ちが破壊しようというのなら……」

いったんきつてからあらん限りの声を張り上げた。

「俺はお前のその腐った考えを天が罰を与えるのに変わって、おれ自身が炎罰を与えてやる!!」

声に殺気をこめて答える。しかし男はまったく動じない。

「お前ごときが私に勝てると思ってるのか??この青二才が!!」

そう言い残すと車を発進させた。いつの間にか男たちも消えていた。どうやら帰ったらしかった。

「幸せね・・・俺は・・・」

そう言い残し、着替えを済ませるために校舎に入っていった。

紅也はその後のリレーなどで大活躍し、妹たちや茜とともに賞状を貰った。帰り道、妹たちが先頭を歩き、その後ろを茜と紅也が歩いていた。

「これからも今日みたいに狙われる可能性がある、常に君の楚辺にいることを進めたいんだが・・・。君が了承さえくれれば」

「そうですか・・・」

しばらく下を見たまま考えていた茜だが、頭を上げて。

「私を助けてくれませんか？桐崎家という闇の中から・・・。あそこにはもう帰りたくない。やりたいこともできない。欲しいものはあってもやりたいことが無い・・・。そんな生活はもう嫌なの・・・。興まで一緒に住んでみて、ここはあちらよりも手間はあってもそれをやってよかったという満足感を感じることができ。だから私はここにずっといたい」

顔を真っ赤にしながら紅也を見つめる茜。夕日ではない。顔が上気しているためだった。楓たちは何も言わずに2英を見ていた。紺屋も驚いた顔から仕事モードに移行する。

「今の俺が君を好きかどうかは分からない・・・。でもこれだけは言える・・・仕事だから一緒にいるわけではないということ・・・。それだけははっきりしている」

「アニキ!!」

急に楓が大きな声を出す。

「兄貴はいつも私たちのことばかりだよね!!少しは自分の幸せも考えてよ!!」

「そうですねお兄ちゃん・・・」

梓も続ける。顔には涙を浮かべ、手をぎゅっとつかんでいる。

「私たちはもう十分お兄ちゃんに幸せを貰っています。だから今度はお兄ちゃん自身が幸せになってください。だって今度は家族みたいに慣れるかもしれないから」

親がいない・・・。それが彼らにとってほかに過程と違っていたのだ。だから3人は兄の紅也を父親の理想像としてみてきた。それは今でも変わらない。そして今は母の姿を茜から見ようとしている。周りから見れば子彼らは中のいい家族に見えるに違いない。

「そうだぜ兄ちゃん、兄ちゃんは俺達の大黒柱。つまり父親ってわけだ。兄ちゃんは俺達に理想の父親像を見せてくれた。今度は母親像を見てみたいぜ」

そついわれて顔を真っ赤にさせる茜。さらに真っ赤になったためもう卒倒しそうである。紅也は考えた。

（仕事のために最初はかくまった・・・。数週間一緒に過ごした。確かに何も家事ができない。これでは母親像は無理だ・・・。それ

はなぜか??それは彼女を縛っているものがあるからだ。仕来りがあるからだ。それをぶつ壊せばなんでもない。ならやるべきことはこれなのか??本当に彼女は望んでいるのか??だからそのようなことを言ったのか??考えても分らない)

茜はきつと目をまっすぐに紅也を見つめていた。彼女はもう逃げていない。

「アニキは寂しかったんだろ??だって1人で闇の世界に入ってたんだ。俺でさえ怖くていけないところに、死に物狂いで修行して・・・」

楓の言葉が紅也の凍った心を溶かす。

「お兄ちゃんは頑張ってます。褒めてほしいんじゃないですか?」

梓の言葉が紅也の凍った心をさらに溶かす。

(な・・・なんなんだこの感覚。胸が熱い・・・)

紅也はおかしくなった己の胸に手を当てる。動悸が激しい。今までにない感覚。理解が追いつかない。否理解できない。

「兄ちゃん・・・頑張ってるんだからさ。もっと素直になろうぜ」

輝の言葉が紅也の凍った心をさらに溶かす。

紅也はいつの間にか己の胸を強くつかんでうずくまっていた。意味不明な痛みが胸にあふれてくるのだ。目頭が熱い。

そして不意に柔らかいからだか紅也を包んだ。目の前には茜が紅也

を抱きしめていた。茜からは女の独特の甘い香りがした。

（なんだか・・・懐かしい。こんな感覚いつ以来だろうか・・・）

いくら紅也が思い出そうとしても闇ばかりが彼を襲う。彼の記憶には無いエピソード。彼は知らなくても彼を産んだ両親は知っている。

（ああ・・・そうか・・・この感覚は・・・）

「・・・ううううう・・・えっぐううううう・・・うわーああああああああ」

紅也はまるで生まれたばかりの赤ん坊のように泣いた。しかし妹たちと茜は笑わなかった。むしろ安堵している。彼がテメ込んでいたものが今吐き出されているから。紅也は小さい頃からたった1人で戦ってきた。誰にも頼らず、誰にも褒められず。だからこそ茜に感じるものは懐かしさ、そしてまた別の感情。

「おかあさーん！！うわあああつあああああ」

茜のことを母親と勘違いしている。しかしそんな紅也を優しく撫でてあげる。それは泣く子供をあやす母親のように。

「頑張ったね・・・よく頑張ったね」

「ああ・・・俺頑張ったんだ」

「頑張ったね・・・だから少しお休み」

「休んでいいのか？？こんな俺でも??？」

「私があなたの休む場所になりたい」

「ああ・・・」

そして彼らは抱きしめあった。坂の上の空は茜色に染まっていた。



## 5 体育祭で（後書き）

コメント待ってます!!

## 6 七夕で

今日は7月7日七夕の日だ。紅也と茜が付き合っていることはあの日の翌日に恋人宣言したために学校中に広まった。生徒会長と幼馴染には冷たい目で見られたが、今は関係修復が完了している。同級生にはリアル鬼ごっこ並みに追いかけられまわされ、死ぬ思いだった。

「アニキ!!!ご馳走まだ?」

ろくに料理をしない楓が腹を空かせて叫んでいる。

「そんなに文句言つなら、お前も料理手伝え!!」

「私はそんな細かい作業が嫌いなの!!」

「そんなこと言つてたら、お嫁にもらえないぞ!!」

「私は料理とか家事のできる男を捜すの!!」

「なんてわがままなんだ・・・」

そんなくだらないとは言いつれもないなんともおかしい会話を料理の手伝いをしながら聞いていた茜と梓はくすくすと笑っていた。初めは失敗ばかりで大変だった茜だが、最近はようやく慣れてきたようで、3食の手伝いをするようになっていた。もちろん妹たちも手伝いはするのだが、ほとんどは紅也と茜で作ってしまう。妹たち曰く夫婦料理なのである。言われていた当初は2人とも顔を真っ赤にし

ていたが、最近はなれたのかそれが普通と捕らえていた。これは学校でも有名で、茜が紅也の家に同棲していることはまだ言っていないが、朝早く来て作っているといううわさが流れていた。真実を知る妹たちは心の中で爆笑しているのだ。そんなこんなで今は七夕に向けたご馳走を作っていた。焼肉に、サラダ、寿司、さらには手作りオードブルなど。部活帰りの楓と輝にとっては最後の晚餐に近かった。

「いっけね、肉にかけるたれを買い忘れてた」

「ちょっと何してるんだよ兄ちゃん！！そんなんじゃ美味しく食べないだろ??」

「分かった今買ってくるよ・・・」

「私が行こうか??」

茜が役を買って出ようとしたが・・・。

「お前は今追われてる身なんだから夜道は危険だ。俺が行く」

そう言つて、紅也は夜道を走ってスーパーに向かった。

きーん

自動ドアが開いて紅也は外に出る。雲ひとつない澄み切った夜空だった。

「今日なら久しぶりに天の川が見られるかな??」

買い物袋にたくさんのお菓子とみんながよく遣う焼肉のたれを入れて帰宅の途についていた。しかし問屋はそう簡単に幕を下ろしてくれない。

「やはり来たか・・・」

紅也の周りには黒尽くめの男たちが6人囲む形で現れた。茜を連れ戻しに来た部隊だ。紅也はすぐにサングラスとマスクをすると買い物袋を置いて、手には炎を作る。しかしここは住宅地。大きな音を立てると人々にも被害が出てしまう。相談屋としては大きな事態にもって行きたくないのである。

「お前らもいい加減にあきらめたらどうだ??」

「それはできない。ボスの命令だからな」

「お前らは彼女の気持ちを考えたことはあるのか??」

「そんなのはボスの前に無力。われわれには関係のないこと。ボスの命令が最優先」

「やっぱりお前ら腐ってるよ!!」

炎で作り上げた巨大な腕を振り回し男たちを殴り倒していく。まさかの攻撃に驚く男たち。鉄砲の発砲を食らうも頭を炎でカバーしているために効果はなく、体にいくら食らってもそれほど痛手にはならない。構造が常人とは違うのである。

「Giant's (巨人) iron hammer (鉄槌)!!」  
次々と倒れていく男たち。しかし中に紅也の攻撃をかわすものもい

た。

「お前は今までのやつとはまた違った感じがするな」

「下っ端使つても意味がないことをボスが判断したんだよ。まさかお前ごときにわれわれが使われるとはな!!」

「お前らは一体??」

「俺らは戦いに特化した人間さ!! 戦いのためにあらゆる訓練をクリアしボスの警護を勤めている」

「国も物騒なやつを影では作ってるんだな」

「この国がそんなにきれいと思っちゃいけないぜ。この国の売れは汚く、醜い」

「俺もお前もその住人か・・・」

「そついうこつた!! よく分かってるじゃねえか!!」

「それでも俺たちはその世界で幸せを見つけた・・・」

「俺達は誰も幸せにはなれない!! 人を傷つけるしかできないのさ!!」

「そんな俺たちの幸せをぶっ壊すやつは俺がこの手で焼き尽くす!!」

紅也の腕に再び強大な炎が集まりだした。しかしそれが発動する前

に。

「おせんだよ!!」

「ぐふ!!」

敵の回し蹴りが腹にクリーンヒットした。それに続けて膝蹴り・とび蹴り・とび膝蹴りさまざまな足技が高速に繰り出される。対する紅也はまだ技の発動に戸惑っている。

「ひやははは、何もできないのか?? そりゃそうだ!! 俺は組織内で最も早い男だからな」

防御ができないまま、ただただけられ続ける。そしてついに紅也はばさ・・・

荒野が倒れたのだ。体中がずたずたで血でにじんでいた。息も絶え絶えだった。

「はぁ・・・はぁ・・・そろそろ息の根止めてやるよ!!」

男は空中からかかとお年を腹に狙って繰り出す。それよりも早く紅也は。

「Dragon's ブレス breath (息吹)!!」

龍の形をしたものが紅也の腕に表れ、大きな口から炎を吹き出した。

その頃五十嵐家では紅也の帰りを待っていた。いつもならば数分で帰ってくる紅也が1時間たっても帰ってこないためにみんな心配し

ていた。

「アニキのやつどしたんだろ・・・」

「お兄ちゃん・・・また何かに巻き込まれた??」

「兄ちゃんのやつ・・・また戦ってるんじゃないか??」

3人の兄弟達は心配の言葉を出す。

「私のせいなの・・・??」

泣きそうな顔で言う茜。一番心配しているのは彼女なのだ。

「私見てくる!!」

茜は覚悟を決めて外に行こうとするが腕をつかまれる。

「梓ちゃん??」

梓が泣きながら腕をつかんでいた。

「アズサ・・・」

「梓・・・」

いつもはおとなしい梓が大胆な行動に出たことにびっくりしていた。

「お兄ちゃんは帰ってくる。あなたはただ待っていればいい。信じ  
てあげていればいい」

そのヒトミには一寸の曇りもない。ただ兄の帰りを信じているのだ。

「そうだな！！兄貴は強いんだからな！！」

からからと笑いながら言うのは楓。

「それなら短冊に何か書けばいいんじゃないか？？兄ちゃんがくるまで書きちまおうぜ！！」

輝が提案する。4人で思い思いに短冊に願いを書いていく。それはかなつのだろうか？

あたりは炎に焼かれて煤だらけになっていた……。あたりには立っている人影が1つと倒れた陰が1つ。

「はあはあ……。くそつたれが」

紅也が立っていた。傷だらけで……。倒れた男は真っ黒に焦げて倒れていた。すでに息はなかった。

「また……。血に染まったのか？？」

『殺したのだ』

『お前は殺した』

『人に神の裁きを下した』

『それがお前だ』



ふらふらと袋を持って歩き始める紅也。先ほどの声は昔から聞いている。最近は聞いてなかったが、久しぶりに聞いた気がする。

「俺は光を求めてはいけないのだろうか・・・」

紅也は1人声をこぼして歩き続ける。光の世界に住むものたちの元へいくために・・・。

がちゃん

紅也は家のドアを開けた。すると目の前には涙顔の茜がいた。ぼろぼろの紅也の胸に飛び込んできた。小さな体が紅也に包まれる。

「どうしたんだ??そんなに泣いて」

「紅也が帰ってこないからでしょ!!心配したんだからね!!」

胸をぽかぽかと殴る茜。痛くはなかったが、心が痛かった・・・。

「ごめん・・・」

そんな沈んだ顔をする紅也の背中をバシッと楓は叩く。

「俺達の短冊の願いはかなったぞ!!」

「よかった」

「当然だな!!」

口々に紅也にはわからないことを言ってくる。みんなでリビングに行くところには紅也が持ってきた笹に短冊が4枚かかっていた。ど

うやら紅也が戦っているときに書いたものらしかった。

「みんなもう書いてたのか。なんて書いたんだ?？」

紅也が腰を下ろしてみてもそこには・・・。

『アニキが勝ちますように!! 楓』

『お兄ちゃんが無事でありますように。 梓』

『兄ちゃんが帰ってきますように!! 輝』

そして最後の1枚は茜が書いたものだった。

『紅也とみんなでご馳走を食べられますように。 茜』

熱い涙がほほを伝っていた。

「俺は幸せ者だな・・・」

ボソッと紅也がつぶやくと。

「何言ってるのかなアニキは。アニキにはもっと幸せになってもらわなきゃ困るんだよ!!」

「そうそう、お兄ちゃんは頑張りやさんだから」

「今日はみんなでご馳走だ!!」

輝は袋からテレを持ちだすと一目散にテーブルへ。それに続いて楓

と梓も。

「また狙われたの?？」

茜が申し訳なさそうに尋ねてくる。

「大丈夫。俺が守るから」

紅也の瞳には一寸の曇りもなく、覚悟に満ち溢れていた。

「よろしく」

茜もにつこりと笑った。

「それじゃあ、紅也も何か短冊に願い事書いてね」

そう言ってペンと髪を渡してくる茜。どうやらこういった行事もしたことがないらしく、かなり興奮している。

「俺は・・・」

紅也はにつこりと笑いながら書いていく。それをほほえましそうに見つめる茜。その後は皆でご馳走とお菓子を食べまくった。ほとんど楓と輝の腹の中に吸い込まれたが。楽しい七夕になった。その日の空には天の川がきらめいていた。

『家族みんなが楽しく幸せになれますように。 紅也』

天の川に2人の男女織姫と彦星が出会ったとき、地上でも1組のカップルが出会っていたのだった。それがいつなのかはみなのご想像

に任せよう。

## 6 七夕で（後書き）

コメント待ってます!!

## 7 夏休みでパート？（前書き）

夏休み編開始！！3部作で行きます！！どうぞ！！

## 7 夏休みで パート？

今日から夏休み。五十嵐家では現在紅也と茜だけがいた。妹たちは現在部活でいないのである。最近夜の仕事が多いことから寝不足が続いていた紅也だが、仕事がないことが続いていたため、さつさと宿題を終えようと勉強していた。成績が普通の紅也はうんうん悩みながらも何とか解いていくが、成績優秀な茜は次々と問題を解いていく。

「茜ここ分かん」

「そこはね．．．」

こんな形で勉強をしていた。しばらくたち現在は昼過ぎ。そろそろ妹たちが帰ってきてもいい頃だ。

「飯」

いつものごとく女の子らしさのかけらもなく帰ってくるのは長女の楓だ。楓は紅也と茜が作っていたサンドイッチの1つをつまみぐいした。

「コラ楓ちゃん！！みんながきたらでしょ？？」

怒っているのは茜だった。紅也は今手が放せないで代わりに茜が説教していた。姉というよりは母親代わりの茜に怒られしゅんとなってしまう楓。その後すぐに帰ってきた梓と輝もくわえて昼食をとった。

妹たちが食器洗いをしていると。

P L L L L L

紅也の携帯がなった。着信履歴は。

「生徒会長・・・仕事か!!」

仕事モードになり、すぐに電話に出る。

「どうした」

「仕事よ」

「内容は??」

「隣の県のとある町なんだけれども。何でも町の人を無視したダム建設が進められようとしてるらしいの。その人たちからそれを阻止して欲しいと頼まれたの。阻止するには企画書や承認書を奪えばいいわ」

「そのダムの利用価値は調べてるんだろうな」

「当然。コードネーム“影”<sup>シヤ下ウ</sup>から聞いているわ。まったく意味のないもので、ただの税金の無駄遣いらしいわ」

「さすがだな、収集が早い。それにあんたもさすがだ。資料がすぐに手に入る。<sup>プリンセス</sup>“姫”」

「でもあなたはもう手に入らない」



「それはもう終わったことだろう。今は仕事だ」

「つれないのは相変わらずね。まあいいわ。それよりもこれはレベルCよ。低いからってなめてかからないでね」

「分かってる。奴らが関わってるかもしれない」

「そうなたらこの前みたいなやつが出てくるかもしれないわよ」

「そうなたら焼き尽くすしかないだろ。いつも警戒しているからな。鍛錬も怠っていないから日々成長だ」

「あなただつて人間よ。無理は禁物」

「そうやって心配してくれるんだな。 “ 姫 ” 」

「時間は夜の10時よ。しくじるんじゃないわよ」  
ガチャリと電話が切れた。心配そうな茜が利いてきた。

「また仕事なの??」

「ああ、今度は隣の県らしい。俺はこれから出かける」

「またあんなことにならないよね??」

茜が言っているあんなこととは、七夕のときに戦闘部隊の1人にぼこぼこにされながらも辛くも倒したときのことだった。あの時は傷だらけで帰宅した紅也だったため、みんな心配したのだった。それでも紅也は笑みを作って。

「心配ない。俺はまたここに帰ってくる」

「当然だよアニキ。ここはわたしたち5人がいるべき場所だからね」

妹の楓が上からかぶさってきた。

「楓、そんなことしているとお兄ちゃんに迷惑ですよ」

楓を諭しているのは梓だった。

「気をつけてくださいね。私たちは本当に心配なんですから」

「兄ちゃん、姉ちゃんを泣かせたら駄目なんだからな!!」

腕を組みながらやってきたのは弟の輝。

「しないように頑張るよ」

そう言い残していつもの着替えをケースに入れて家を出た。夏休み初日は荒れそうだった。

そして現在は夜の9時55分。そろそろ例の資料を利用した会議が行われるらしい。そして今日がはんこを押して承認する日でもあるらしい。

「まったく“影”さまさまだぜ」

にやりと笑いながら仲間を褒める。そしてすぐに気を引き締めいつもの服装で中に道場破りのごとく入る。

バコーン

ドアを吹っ飛ばして中に入る。そこには驚いてイス後とこけている大人たちと彼らを守ろうとしている黒尽くめの男たち。

「またお前らが関係しているのか・・・」

「われわれはボスの命令で動いているまでだ」

1人の男がしゃべる。いつ聞いても感情のない声である。

「それはいいとして、お前らの持っている資料をよこせ。『相談屋』が処分する！！」

殺気をわずかに見せるとおびえて資料を差し出す中年の小太りの男がいた。どうやら全て揃っているらしい。しかしそれをさ遮るようにして男たちが割ってはいいる。

「何をしゃがる・・・」

紅也はどすの聞いた声をあげる。それにもひるまない男たちとすでに矢神寸前の役人たち。

「われわれはボスからこの計画を無事に済ませるようにといわれているためにそれを妨害しようとする貴様を消さなければいけない」

「だったらお前らを焼き尽くし、そして資料を貰っていく！！」

「かれ」

そうして戦いは始まった。

ぽつぽつと雨が降ってきた。茜たちは紅也のいない夜を過ごしていた。リビングでは妹たちが頭を抱えて宿題と格闘していた。茜はすでに終わらせていたため、彼らの質問に律儀に答えていた。

「雨降ってきたね」

楓がぼつりと言った。

「お兄ちゃん・・・傘持って行ってない」

梓がつぶやく。それには心配の色が濃く入っていた。

「兄ちゃんだったらそこの水を蒸発させて帰ってくるんじゃないか??」

からからと笑いながら冗談を言う輝。

それを3人で笑った。

「紅也・・・」

あかねは紅也のいる方向を見ていた・・・。

「くそつたれが!!」

紅也は吐き捨てる。資料は何とか奪取した。男たちの体をかいくぐって役人を殴って奪ったのだ。しかしそこから今までとは違う強さ

の男たちに苦戦していた。巧みなフットワークとコンビネーションに翻弄されていた。相手は6人。いつもならば全体技を使うが、今日に限って雨のため炎の威力が少ない。一気に叩き込むには時間が必要だった。

「われわれは」

「ボスの護衛を果たすために」

「戦いに特化した人間」

「貴様のようなガキが勝てる相手ではない」

「資料をおいて」

「ここを立ち去るがよい」

それぞれの男たちが面倒なことをしながら言ってきた。

「おあいにくだがこれは仕事なんですね・・・それは飲み込めないな」

「それならば・・・」

『死あるのみ!!』

男たちが一斉に飛び掛ってきた。紅也は懷から自動型拳銃を取り出して己の力を付加して炎の弾丸を放つ。

「「「「Ohashi(炎)「「」 of flame(追走)!!」」」」

だん だん だん だん だん

銃弾が2人の男の腹に命中した。穴を開けるだけではなく更に傷を灼熱の炎で焼き尽くすので痛みは半端ではない。悲鳴を上げてのた打ち回る男たち。いくら鍛えているからといって耐えられるレベルではなかった。それでもひるまない男たち。自動型拳銃など仕事を始めた頃まだそれほど術が使えなかったために使っていたものだ。それから長い月日が流れ、さまざまな鍛錬と研究で今の術が完成したのだ。

「それぐらいでわれわれがひるむとも思っただか??」

「思わないね・・・」

巧みな攻撃を何とか受け流しながらタイミングを図る紅也だが。思いつき顔面にパンチを食らってしまった。吹き飛ばされる方向には更に二人の男がいて紅也に対して同時に正拳を放つ。

「そうか・・・こいつらが使っていたのは・・・」

拳法だという前に更なる攻撃が紅也を襲う。今までとは違う強さ。紅也がまだあったことのない強さだった。

（このままではあいつらも危険な目にあわせちまう・・・）

男たちは東西南北の形に並んで攻撃している。

「東の青龍!!」

「西の白虎!!」

「北の玄武!!」

「南の朱雀!!」

円を描きながら紅也は宙を舞う。血が男たちの足元を真っ赤に染めていた。まるで魔方阵を（・）描く（・・）よう（・・）に（・）丸く（・・・）。。。

「The world is created and five elements.（世界を創造し5つの要素）Flame of flame and revolution of flame and creation of destruction（破壊の炎・創造の炎・変革の炎）Before having called the birth angel from the flame here（ここに炎より生まれし墮天使を呼び出したまえ）The name is Garland.（その名はガランド）It is an angel of destruction.（破壊の墮天使なり）」

男たちのちょうど真ん中が赤い炎で埋め尽くされ、その中から真っ赤に燃えた人型の怪物が現れた。背中には真っ赤に燃えた羽があった。

「天使なのか・・・??」

男たちがとうとうおびえだした。人間ではないものが出現したのだから、仕方がないといえば仕方がない。しかしそれでも彼らにとつてはボスの命令が絶対だった。

『うおおおお』

男たちが突っ込んでくる。

「ガーランド・・・好きにしてくれ」

『クロス』

ガーランドが手を前に突き出した。すると男たちの足元から勢いよく炎が噴き出し骨も残らないくらいの出力で・・・殺した。そうして天使はふっと消えてしまった。どうやら雨が降ってきて、魔方阵が消えてしまったらしい。

「ありがとう・・・ガーランド」

紅也はふらふらと痛む傷を抑えて茜たちの待つ家に向かった。その後、帰ってきた紅也を見て茜が鳴いたこととそれを見た妹たちにきつく説教されたことは言うまでもない。



## 7 夏休みで パート？（後書き）

コメント待ってます!!

## 8 夏休みで パート？

現在は夏休み中盤のとある日。今日は皆で海に来ていた。

茜や妹たちと別れた紅也は輝とともに男子更衣室で着替えた。

「兄ちゃん・・・最近戦いが激しくなっていないか??」

輝が不安がるのも無理はない。さまざまな仕事に関わっているが毎回桐崎家に関係しているのだ。生徒会長がわざとそれを選んでいるとは思えないが、不気味だった。

「心配してくれるのか??大丈夫さ」

普通モードでしゃべる紅也。

「姉ちゃんの心臓にも悪いぜ」

「俺の仕事はそういうものなんだ、こればかりは避けることはできない」

「そうか・・・」

「こんなことで暗くなっちゃ来た意味なくなっちゃまうだろうが。今日は楽しもうぜ。なんならお前はナンパでもして来い」

「あはは、それはいいかも。楓たちもナンパされるかもな」

「そのときは俺が止める」

「へー兄ちゃんには姉ちゃんがいるのに??」

「ななな何いつてるんだ!! 確かに俺は茜と付き合っているが、さっきのは兄としてのことだぞ!!」

「はいはい、そんなにあわてなくてもいいじゃないか兄ちゃん」

言い争いをしながら紅也たちは3人の待つ外に出た。

ぎらぎらと照りつける太陽の下紅也たちは海の中ではしゃいでいた。初めての海に大興奮する茜と妹たち。紅也は仕事で何度も海に囲まれた国に言っているために普通に楽しんでいた。動物型の浮き輪に乗ったり、浅瀬でビーチバレーをしたり。楽しいひと時を過ごしていた。そして現在はお昼。海の家で食事を取っていた。

「うまいうまいうまい」

楓は注文した料理を次々に飲み込んでいく。午前中一番はしゃいだのは彼女だ。よほど腹が減っていたのだろう、ほとんどのメニューを注文していた。紅也はそれにあきながらも自分の飯を食べ、梓はゆっくりと食事をし、輝は楓に対抗するかのように食べているし、茜はそれを見てくすくすと笑いながら食べている。なんともほほえましい風景だった。

そして午後は紅也はパラソルの下で休んでいた。いつ仕事が入るか分からないため、これ以上体を遊びで酷使するわけにはいかなかったのである。ねっころがった頭付近には炭酸ジュースのペットボトルが5・6本から転がっていた。再び紅也がクーラーボックスから炭酸をとりだし飲み始める。

「疲れた・・・」

ふと視界が暗くなった。誰かが手でさえぎったのだ。

「だ〜れだ??」

女の子の声がした。紅也はすぐに。

「茜か」

「正解〜。もう紅也ッたらつまらないな〜」

「俺はこんな反応しかできないさ」

「仕事大変そうだね。毎回傷だらけで帰ってくるから・・・」

「心配かけてすまないな。でもこれが俺の仕事なんだ」

「私のせいかな・・・」

「そんなことが嫌なら俺は最初からこれを承諾してはいないさ」

「そうなの??」

「誰がこんな下っ端がレベル・オーバーの仕事をすると思う??? 自殺行為さ」

「それでも・・・」

「お前は今までどおりやりたいことをすればいい」

「紅也・・・」

「立った一度の人生だ。楽しまなきゃ損損」

「そうだね。分かった」

「それに十分リフレッシュできたし。おれ自身」

「それにしても今日は楽しかったな。初めての海、初めての海の家、そして初めてのデート・・・」

「俺もさ・・・」

日陰でよくわからないが紅也の顔は赤かった。傍に座った茜のビキニはわずかに差し込む太陽に輝いていた。

「似合ってるよ・・・」

「へ??」

「だから・・・その・・・水着」

顔を更に真っ赤にさせた紅也。茜も紅也から背をそむけるようにして。

「ありがとう・・・」

顔は見えなかったが茜もきつと赤くなってるだろうと紅也は思っていた。それを影からニヤニヤと見ている妹とたちがいた事に気づい

てなかった。そして妹たちは願っていた。こんな日ぐらいは幸せな  
1日で終わって欲しいと……。もちろんそんな日が続いて欲しい  
と願ってるのだが……。

## 8 夏休みで パート？（後書き）

コメント待ってます!!

## 9 夏休みでパート？（前書き）

夏休み編第3弾！！



## 9 夏休みで パート？

残り夏休みも1週間。夏休みの最後を彩るのはなんと言っても夏祭り・花火大会だ。そういう紅也たちはそれぞれ浴衣と甚平を着て祭りを謳歌していた。

「紅也！！今度はあれ食べよう」

はしゃいでいるのは楓ではなく茜である。祭りも初めての彼女は子供のようにはしゃいでいる。妹たちはそれぞれの恋人と歩いている。そのため紅也と茜もカップルとして行動できているわけだ。それにしても興奮して時の茜の食欲には驚かされる。このまま行けば全商品制覇をしまいそうな勢いだった。それをほほえましそうに見つめながら購入しては一緒に食べている紅也。2人は笑顔だった。

しかしそんな楽しいひと時を破壊するやつらが現れた。人を押しのけてやってきたのは黒尽くめの男たち。ざっと10人はいた。紅也は茜をつれて走り出した。周りの人たちも場にふさわしくない男たちに白い眼を向けていた。そんな視線を無視して男たちは紅也たちを追いかけ始めた。

紅也たちは走ってコインロッカーに向かっていた。中には紅也の着るものが入っているのだ。茜をどこかに隠しておきたかったが奴らのほかにいたらどうしようもなかったのだ。

「今回ばかりは俺と行動してもらっぞ」

「へ???どうのこと??」

「今回お前をどこかに隠しても奴らのほかにいたら見つかって終わりだ。だから俺の傍にいてくれればいい」

「私が危険な眼にあってもいいの??」

「俺がさせない・・・」

「え??」

紅也はふつと笑いながらいった。

「俺がお前に指一本触れさせない!!」

決意のこもった宣言をした。

そうしてここは人気のない川原。黒尽くしの服装になった紅也は茜をつれてここに来ていた。程なくして男たちも到着した。

「われわれのボスからの命令だ!!お嬢様を返してもらおう」

男たちがじりじりと近づいてくる。

「生憎だがこの子を守ると約束したんでね。渡す気はさらさらないんだ」

茜を背中に隠しながらいう紅也。

「相談屋の“焰”よ。お前の強さは分かっている。だがわれわれに勝てないぞ。そうと分かっているにも抵抗するのか??」

「生憎死ぬまでは約束を守り続ける主義なんですね」

「かれ！！」

今度は武器を持った男たちが突っ込んでくる。発砲され、弾丸が飛んでくる。それを紅也は炎でブロックする。殴りかかってくる男たちの攻撃をジャンプしてかわし、木の棒で円を書く・・・。

「The world is created and five elements . (世界を創造し5つの要素) Flame of flame and revolution of flame and creation of destruction (破壊の炎・創造の炎・変革の炎) Before having called the birth angel from the flame here (ここに炎より生まれし墮天使を呼び出したまえ) The name is annaria . (その名は、アリア) 「Ot tenshi」 「nari」 of creation . (創造の墮天使なり)」

円の中からは女性の形をした炎の怪物が現れた。背中にはガーランドと同じく羽が生えていた。

「て・・・んし??」

「違う。墮天使だ」

酷く疲労している紅也に肩を貸す茜。すぐに1人で立つ紅也。男たちはそれでも突っ込んできた。

「ツクル」

墮天使アリアは自らの炎から剣を作り出し。男たちと戦闘を開始す

る。武器同士がぶつかり、火花が散る。その火花から小さな槍を作り出し男たちに向かって放つ。それが突き刺さり刺さった痛みと追撃の炎の熱さでのた打ち回る男たち。それを見ていた茜は口を押さえ、うずくまってしまう。

ドゴンー！

何が起こったのかと紅也は顔を上げる。そこには崩れ落ちる堕天使アリアがあった。紅也は驚愕の表情をしていた。堕天使がただの人間に壊されるはずがないからだ。

「何もんだデメエは・・・」

そこにただ1人立っている男だと思っていた人物にたずねる。そこにいたのは腰まで伸びた髪を持つ女性だった。姿はシスター。手には十字架が握られていた。

「堕天使ごときが神聖なる神の力にかなうはずはありません」

女は淡々と話す。紅也はどうやって戦うかを模索していた。神の力に守られている女に攻撃が届くとは現時点でかなうはずがなかった。

「お嬢様を返していただきます」

「くー！！」

「Please . . blocked hard ship . . get on in front of me now and watch it to exceed it the god . . Please the divine protection . .」

神よ、今我の前に立ちはだかる苦難を乗り超えるために見守っててください。どうかご加護を)」

女の手には十字架ではなくステッキが握られていた。どうやら十字架が変形したものらしい。白く輝くそれから閃光が紅也に向かつて放たれる。それを間一髪で回避するも、すぐに第2波が発射された。

「ぐは!!」

それが腹に命中し、勢いよく吹っ飛ばされる。

「紅也!!」

急いで駆け寄る茜。口から赤い血を吐き出す紅也。2人にゆっくりと近づく女。輝きを増すばかりのステッキ。紅也は炎の剣を作り出し、斬りかかる。それをステッキで受け止められ、更に閃光をくり再び吹き飛ばされる。

「がは!!」

未知の攻撃によってぼろぼろの紅也。表情を変えずに近づく女。茜は腰を抜かせて立ち上がることができない。

「あなたはここで死ぬのです。神に逆らった堕天使に力を貸したことを、地獄で後悔するのです」

ステッキが今度は剣になり、紅也に斬りかかった。

「やめてー!!」

茜の叫びが響き渡った……。

ダーン！！　グサ！！

銃声と何かに突き刺さる音が同時に聞こえた。女の剣を持つ腕には大きな穴が開いており、その剣は紅也のわき腹を突き刺していた。

「ぎゃああああああ」

女はあまりの痛みに腕を押さえてのた打ち回る。

「ぐああああああ」

紅也もまた止まらない血を何とか止めようと自らの炎で傷口を焼き、その痛みで悶絶している。

真っ白だった修道服が見る見る赤く染まっていく。女は何とか立ち上がるもその表情には怒りが浮かんでいた。

「おのれ・・・まだ神に抗おうとするのか堕天使の分際で！！」

怒りに任せた吐き捨てるかのような言葉に紅也は。

「俺は堕天使とか神とかは知らない・・・。だがこの子を助けるためなら何に対しても抗ってやるよ」

息も絶え絶えに言う。

「次にあつたときにはお前を地獄に叩き落してやる！！」

「ああ・・・」

その言葉に切れた女は。

「私の名はカルマ。お前は!!」

「相談屋・・・コードネーム“焰”」

それを聞いた女は足早に消えてしまった。そこに残ったのは血だらけで倒れている紅也とその隣にいる茜だけだ。

「紅也?? 敵はいなくなつたよ」

茜は軽く揺さぶって話しかける。紅也は口を動かさない。

「紅也?? 早く帰らなきゃみんな心配するよ」

先ほどよりも強く揺さぶって声をかける。それでも紅也は口を動かさない。

「・・・紅也?? 早く帰ろうよ・・・」

眼に涙をためながら話しかける茜。しかし動かない・・・。

「ねえ紅也!!」

大粒の涙を流しながら激しく体をゆする。涙が紅也の顔に当たる。それでも紅也は目を覚まさなかった。

気を失った紅也はその後携帯でなきながら119番通報した茜とともに病院に運ばれ7日7晩眠り続けた。茜は目が覚めるまで付きっ

切りで看病した。簀にも連絡し相談屋の仕事を休むことを伝えた。傷はそれほど深くはなかったのが幸이었다。起きたときにはみんなから抱きつかれ危うく傷が開きかけたのはまた別の話だ。



## 9 夏休みで パート？（後書き）

コメント待ってます!!

10 秋されど恋は色濃く（前書き）

話も中盤。

今回は平和な1日??

## 10 秋されど恋は色濃く

冬も近くなつて秋、紅也と茜は公園を散歩していた。逃亡生活を始めて半年、付き合い始めても半年。そんな2人の居場所は確立されつつあった。

「きれいな紅葉ね」

公園一帯に植えられたもみじの木々には色鮮やかな葉っぱがあつた。

「そうだな」

上を見上げると空に伸びていく木々。紅也と茜はそれらを見上げていた。仕事も順調に行き、家計的にも心配はない。黒尽くめのやつらに関係する事件はこのところご無沙汰である。しかしいつ来てもおかしくないために警戒は常である。

「カップルとか家族連れが多いね」

「俺達だってカップルだろ??」

「そうだね」

今となれば当たり前のことに紅也たちは笑い合う。一は仕事対照としか見ていなかった彼女が今では常に自分の傍にいてくれる大切な存在になった。紅也はそんな彼女の存在を命に代えても守ろうと決意していた。

「今日はゆっくり楽しみたいね」

最近仕事を立て込んでいたためそれほど2人きりの時間がなかった。妹たちも気を使ってくれたのか、今日は2人で行くようにとってくれたのだった。

「何か食うか??」

「あのクレープ食べたいな」

紅也たちはベンチの近くに店を開いているクレープ販売車のところに行った。

「私はバニラで」

「俺はチョコで」

それぞれ購入し、ベンチに座り食べ始める。時間はもう午後3時になっていた。

「ちょうどいいおやつの時間だな」

「そうだね」

お互いに食べることに集中する。

「紅也の少し頂戴」

茜が自分の物を紅也に突き出しながら言う。紅也も仕方がないという顔をしながら食べさせる。

「今度はそっち食べようかな」

茜は飛びっきりの笑顔を見せて言う。それに紅也も顔が崩れて思わず笑みを作る。その後は2人してボートに乗り込む。紅也がこいでゆつくりとした時間を謳歌する。水面に浮かぶもみじをつかんで見せたりと子供みたいな顔を作る茜に思わず噴き出してしまった紅也。

「そんなに笑わないでよね」

「あはは、ごめんごめん」

手を振りながら謝る紅也。ふうつと息を吐きながら仕方ないわねつと茜もあきれながら許してくれる。その後ボートの上ではお互いがあつたときのことから昔話を楽しんだ。

「初めて会ったのは俺が任務から帰った後なんだよな」

「あの時はちやら男につかまってたからね」

「なんで大声出さないのかって思ったぞ」

「あの時初めて外に出たからどうすればいいのか分からなかったの」

「じゃああの時初めて外の世界を見たって事なのか??」

「そうなるね」

茜がちよつと寂しそうな顔をしたので紅也は少し慌てた。

「でもそんなことよりも今の私には居場所がある」

はにかみながら紅也に言う。

「私の居場所は紅也がくれた。篝さんがくれた。楓ちゃん、梓ちゃん、輝君がくれた。そんな大切なところがあるから私は後悔してないんだよ」

「そういつてくれると嬉しいな」

「当然よ」

その後ボートを返却し帰宅しようとして公園の出口に差し掛かっていた。

「あれ??この木・・・」

茜が指差している木には葉っぱが色づくことなく緑のまま残っていた。なんとも寂しい感じがした。

「この木も昔からあるようだな。寿命かもしれないな」

「何とかならないかな・・・このままじゃ仲間はずれでかわいそうって感じじゃない??」

「こればかりは自然の流れで仕方がないんだ。この木だって今までみんなにきれいな紅葉を見せてきたんだ。いまは役目を終えようとしてるのさ」

「そうだね・・・」

納得していてもなんだか寂しそうな顔をする茜。

「どうしてそんなに気になるんだ??これみたいのやつだったらい

くらでもあるだろう」

「確かにそうだけでも……。ここにはこれしかないでしょ？？この木はまるで昔の私に似ているの」

「昔の茜に？？」

「そう……。昔の私。周りにたくさんの人がいるのに友達はいない。いるのはライバルだけ。色づかないものは捨てられる。そんな感じだったんだよね。屋敷にいるときは。必死に頑張って認められるようにしたよ。でも褒められることはなかった。もつと上を目指せといわれるだけ。それに耐えられなくなったときに無理やりの結婚……。私は狂いそうだった。そんな時に紅也たちに助けてもらった。今まで汚い色しか着いてなかった私をいったん真っ白にしてくれて、更にこんなにもきれいな色を付けてくれた。だから昔の私を見ているように見捨てられないんだよね」

茜の目には涙があつた。紅也にやるべきことは1つだけだった。周りには人はいない。あたりは真っ暗。明かりが2里時を照らしているだけ。紅也は木の棒で魔方陣を描く。

「The world is created and five elements. (世界を創造し5つの要素) Flame of flame and revolution of flame and creation of destruction (破壊の炎・創造の炎・変革の炎) Before having called the birth angel from the flame here (ここに炎より生まれし墮天使を呼び出したまえ) The name is Gulliver. (その名はガリヴァー)」「Ototenshi」「nari」 of r

evolution・(変革の墮天使なり。)

「紅也??」

目の前に現れたこの前とはまったく違う炎の怪物。似ているのは背中に翼があること。

「ガリヴァー、この木に変革の力を」

『アラガエ』

ガリヴァーから出た炎が気を包み込んだ。しばらくして消えたところから緑だった葉っぱに色がつき始めた。本当にわずかだが。

「きれい・・・」

「最後の力にちょっと手助けしてあげただけなんだ。この木も来年はないだろうね」

「それでも最後に色をつけた」

「それを俺達が見たんだ。これは忘れられない思い出だな」

「忘れない」

「ああ」

その後二人で手をつないで帰った。彼らがその場を立ち去ったときからゆっくりと色のついた葉っぱが地面に落ち始めていた。まるで彼らに感謝の涙を流しているかのように。そして空からは真っ白い雪が降ってきた。冬がやってきたのだ。そしてその冬の到来とともに



に最後の戦いが近づいてきていることを彼らはまだ知らない。

余談だが、彼らが腹をすかせた3人に帰宅が遅いことを理由に説教を食らったのはまたの話だ。

10 秋されど恋は色濃く（後書き）

コメント待ってます!!

11 冬となり恋は光り輝く（前書き）

いよいよ後半。

戦いは激化する。

紅也は大切な存在を守れるのか？？

## 11 冬となり恋は光り輝く

ついに冬となり雪が降り積もる毎日になってきた。とは言っても都会のここでは1センチ積もるかどうかのものだった。それでも寒いこの季節。みんなで編んだマフラーを着込んで登校する。

「すっかり寒くなったね」

「ああ、もうすぐ今年も終わりだな」

紅也と茜はそろって登校していた。紅也の懐には自動型拳銃が隠れていた。いつでも茜を守るようにするためだ。もちろんコートは最初から着込んでいる。

「その格好だと仕事に行くみたいだね」

「まったくだ、でもこれは防寒性が高いからな。普通のよりもあったかいんだ」

「それば聞き捨てならないですな」

そう言ってくつついてくる茜。周りからの視線を気にしながら学校に登校した。教室に入るとすぐに放送が鳴った。

「2年生の五十嵐紅也くん。今すぐに生徒会室に来なさい」

会長からのじきじきの収集命令だった。こういったときはたいてい仕事だった。それを知っている茜は心配そうな顔をしたが。

「心配するなよ」

そう言い残して紅也は生徒会室に急いだ。

ガラガラとドアを開けるとそこに端と会長の千尋がいた。腕を組んでなんとも深刻な表情をしていた。

「おい、一体何の用だ??」

「仕事よ・・・」

なにやら深刻なものらしい、生徒会長の表情が優れない。

「内容は??」

「この会社の社長が裏金をしているらしいの。その証拠の資料が隠されているらしいからそれを奪ってきて欲しいの」

「レベルは??」

「レベル・マイナー・・・」

「そんなものを俺にやれというのか??」

「父からの直接の以来なの・・・お願い」

「何やら大きな力が動いてそうだな」

「確かに不穏な動きはあるけれどね。父はあなたなら完璧に任務を遂行できるって言ってるは」

「それはやれと言われたらやるしかないが・・・」

「報酬は100万で・・・」

「なんでそんな大金になるんだ??」

「いいからさっさと行って任務を遂行して!!」

「・・・」

会長が何かにおびえているのを紅也は感じ取り、何も言わずに生徒会室を後にする。そこに残された千尋は大粒の涙を流しながら泣いていた。

「うつうつう、ごめんなさい。紅也くん・・・本当にごめんなさい・・・。頑張ったんだけど・・・ヤッパリ国家には勝てなかったよ・・・」

それは桐崎重喜代からの国家レベルのあらゆる機関に対する桐崎茜搜索命令、見つけ次第報告するというものだった。いつまでたっても見つからないことに痺れを切らした重喜代は権力を総動員して発見に乗り出したのだ。そして今回千尋が紅也に言い渡した任務先は・・・。

教室に帰ってきたときにはすでに授業が始まっていた。教師に理由を説明して席についた。

「やっぱり仕事だったの??」

茜が聞いてきた。

「ああ、俺以外でもやれる仕事を俺に無理やり押し付けてきやがった。これは何か裏がありそうだな」

「裏って??」

「お前の父親が手を回してるってことだ」

「パパが??」

「まだ各章はないがその確率が高い。これからは一層警戒を強めるから。お前はいつもど通りに過ごせばいい」

「また紅也に無理させちゃう・・・」

「そう落ち込むなよ。これが俺の仕事なんだ。それに恋人を守るのは当たり前だろ??」

「紅也・・・」

そうしてその日は過ぎて行った。今日はクリスマスだった。

「パーティー前には帰るからみんなで料理してってくれ。下準備は俺がしておいたから。分からないことはアズサに利けばいいから」

紅也はいつもの服装で玄関まで見送りに着ていた茜に言った。

「ちゃんと早く着てね」

心配そうに手を胸に当てて言う。

「アニキの仕事熱心にはあきれるね。こんな日ぐらいは休めばいいのに」

「そう言わないの楓。お兄ちゃんだって本当はみんなと楽しみたいんだから」

「梓の言うとおりだな、兄ちゃん。ちゃんと早く帰ってくるんだぜ」

「ああ、分かってる」

そういつて紅也は雪の降る聖夜の闇の中を突き進んでいった。五十嵐家前には警察と桐崎家の特殊護衛部隊が潜んでいた。

現在紅也は依頼どおりの会社の社長室で裏金社長との取引をしていた。骨董品を炎で焼き尽くし脅しをかけている。

「こつちには依頼が着てるんでね。それに早く帰ってやらなきゃいけないんでさっさと渡しな」

「こんなことになるとは思わなかったんだ！！俺はだまされたんだ！！」

「何を言ってるんだ？？俺は確かに警察から以来を聞いて・・・」

「お前は知らないだろうが現在のありとあらゆる日本企業やら機関は桐崎重喜代に支配されている。今回もお前をおびき寄せるために裏金をわざと作れといってきたんだ。やっても無実にしてやるというんだ」

「な・・・なんだと！！」



紅也は怒りを抑えながらもいう。

「桐崎茜を見つけるためにやっているらしい。その後のことは聞いてない。本当だ！！助けてくれ！！」

泣きながら懇願する社長を一瞥し。

「そういうことかよ生徒会長……。あなたは知っていた俺に押し付けたんだ……。あんたのことだ……。やるだけやってこの結果だったんだろうな……」

そして禁断の炎術式を唱える。

「翼を失いし堕天使に再び翼を与えたまえ！！Wing of angel of flame（炎の天使の翼）」

紅也の背中に炎の双翼ができた。そして最上階から拳銃でガラスを割り飛び出す。

「茜！！今行く！！」

今宵堕天使が聖夜の空を飛んだ。これを知るのは神のみかもしれない……。

少し時間をさかのぼり五十嵐家。

「ふふふーん」

楓がテーブルに座り出来上がる料理を待っていた。

「楓ちゃん、少し手伝って!!」

大忙しの茜は楓に助けを求める。

「私が料理すると大変なことになるよ」

「そうそう、姉ちゃん。こいつが料理すると爆発するんだぜ」

「輝〜!!」

「やっべー!!」

怒った楓が輝を追い掛け回す。ばたばたとにぎやかなリビング。何とか梓の協力で完成した。

「後はお兄ちゃんが来ればいいんですね」

ニコニコ顔で茜に言う梓。

「そうね、紅也ったら何やってるんだか」

「主役は遅れて登場ってか??」

「誰??」

突然外から聞きなれない男の声がした。次の瞬間。

ガッシャーン!!

窓ガラスが破壊された音がした。

「「「きゃー!!!」」」

「ぬおおおお!!!」

悲鳴を上げる女性人。そこに立っていたのは修道服を着た女と神父姿の男そして若い男の3人だった。

「誰ですかあなたたちは!!!」

茜が叫ぶ。

「お嬢さま。こんなところにいらっしゃったのですか??お父様は大変苦勞をなさられてますよ」

若い男が口を開く。

「まったくこんな薄汚い一般人の家にいるなんて・・・しかもあのクソガキの家だなんて」

「アニキを知ってるのか??」

「知ってるも何も私はあいつと戦って相打ちになったんだよ」

「あの時・・・お祭りのときの」

「お前が兄ちゃんを苦しめたんだな!!!」

「子供たちよ。君たちはこのことには無関係だ。少し痛いかもしれなくてもじっとしていてもらうよ」

神父が首から提げた十字架に手を触れた。

「神を殺しし十字架よ、このものたちを捕縛せよ」

「姉ちゃん！！逃げろ！！」

十字架の力が発動する前に輝が走り出していた。神父に向かって殴りかかる。

「うおおおおお」

しかし、女の剣に阻まれる。

ズシャアアア！！

右肩から斜めに切られる輝。鮮血が舞う・・・。

「ぎゃああああ！！」

悲鳴を上げながら倒れ、気を失う輝。それを涙を流しながら茜は梓に誘導されながら裏口に急ぐ。

「ここは通さないぜ！！」

楓が手を横に広げて通せんぼする。

「お嬢ちゃんを傷つけないんだけどね・・・」

眼を伏せた若い男。動かない2人の神父とシスター。

「The angel who the me in front  
of me now before it had it .  
doing「hikanozo」. . .「wo」imag  
ination and . . . remainder . . . god .  
. Subjugate「ototenshi」「wo」a  
nd the angel . Professional mor  
tar（余を想像し神よ、今我の前にその僕である天使を光臨させ  
たまえ。墮天使を討伐し天使を。プロノウス）」

楓の目の前に現れたのは黄金に輝く天使。

「なんで??」

次の瞬間天使の翼から放たれた刃物のように鋭い羽が楓を貫く . . .

「きゃあああああ!!」

血しぶきを上げて後方の吹き飛ばされる楓。壁に激突し、気を失う。

「裏に回っても無駄だろうね」

「ああ . . . ああああ . . .」

声にならない悲鳴を上げている2人。先ほど神父が発動させた十字架によつて捕まっていた。目の前には3人が現れる。

「お嬢さま、あの2人は殺してはいませんよ。今あなたが素直に来てくださればその女の子は助けてあげましょう」

若い男が言う。

「本当ですか??」

茜が恐る恐る聞き返す。

「だから言ってるじゃねえかくそアマが!」

「口が汚いですよ」

「すまねえ」

神父に諭されるシスター・カルマ。

「ええ、本当ですよ。お嬢さま」

「なら行くわ……。これ以上この子達が傷つくのは見ていられない」

「母親みたいです」

「私はここでは母親役だよ……」

「まって……お姉ちゃん……」

何とかもがきながら梓が言う。

「まだ反抗しますか……。可愛いそうですが。四肢に光の杭を」

ぐさー！！　ぐさー！！　ぐさー！！　ぐさー！！

「あがああああー！！」

悲鳴を上げる梓。

「やめてー！！もうやめてー！！なんで約束破るのよー！！」

「私はしましたが・・・この神父はしてなかったので・・・」

「このうそつきがー！！」

殴りにかかる茜だが。

『捕縛』

天使に捕まれ動けない。

「離してー！！離さないー！！離せー！！」

「少し静かにしてくださいよお嬢様」

どがー！！

茜は腹を殴られ悶絶する。そしてそこに。

「茜ー！！」

空から聞きたかった声がした。空を見るとそこには赤い双翼をはやせた紅也が飛んできた。

「紅也!!」

痛みを我慢しながら大きな声を出す。

「茜を離せ!!」

「ようやく来ましたか堕天使が!!」

若い男は急に顔を変える。怒りに満ちていた。

「ガキがようやく登場かい??」

カルマはけたけたと笑いながら言う。

「神にそむきしものよ・・・」

神父もそれらに続く。

「貴様らに炎罰を下す!!」

「神でもない貴様が!!」

「私たち神に使えしものに!!」

「罰など不可能・・・」

「行くぜ!! ガーランド!! アリア!! ガリヴァー!!」

3体の堕天使が召還された。それぞれが3人に攻撃を開始する。



『コロス』

ガーランドが天使に攻撃する。天使も反撃として攻撃する……。

『神の怒り』

ピシャーン!!

雷がガーランドの上に落ちたかに見えた。そして紅也は見た……。

「何だと……」

『グウウウウ……』

ガーランドが崩れていく様子を……。

「きゃははは、なんだいこの女堕天使。大した事ないな」

炎を操り攻撃するアリアの攻撃を変形させた剣で斬っていた。

「これでもくらいな!!」

剣が1本の槍に変わった。

「Spear of deicide（神殺しの槍）!!」

グサ!!

アリアの腹に刺さった槍。そのままぐったりと崩れていく。

「そんなバカな・・・」

まさかと別方向を見ると・・・。

「ガリヴァー・・・」

最後のガリヴァーが十字架に押しつぶされるところだった。

「神の偉大さを感じよ・・・」

神父が止めを刺すところだった。

「紅也・・・」

まさかの情景を見ている茜。今まで紅也の勝ったところしか見たことがなかったからだ。信じられなかった。

「そろそろチェックメイトですね」

若い男が言う。すでに紅也は天使の攻撃を受けてぼろぼろだった。更には四肢は十字架に光る杭で固定されていた。そしてとどめは腹に剣が突き刺さっていた。

「神による天罰が下らん！！」

ピシャーン！！

紅也に向かって雷が落ちた。

「うああがががああああ!!」

「やめてー!!」

茜は叫んだが、紅也はその場に倒れた。双翼は千切れていて、服はほとんどが燃えてなくなっていた。

「紅也!! 紅也!! いやー!! 紅也!!」

何度も名前を呼びながら茜は来たヘリコプターに乘せられ連れて行かれた。

しばらくして紅也は目を覚ました。痛む体に鞭打って立たせる。すぐ紅也の眼に入ったのは血だらけで倒れる妹の梓だった。

「梓!! 梓!! 大丈夫か??」

声をかけても一向に目を覚まさない。紅也は嫌な予感がした。梓を抱えて中に入る。そこには・・・。

「楓・・・、輝・・・」

血だらけで倒れている妹と弟の無残な姿だった。紅也は外を見た。なぜか五十嵐家にだけ真っ赤に染まった血の雪が降っていた。

「うわあああああつあああつあ!!!!」

紅也の・・・墮天使の叫びが響き渡った。クリスマスだった・・・。

11 冬となり恋は光り輝く（後書き）

コメント待ってます!!

## 12 クリスマス〜聖夜はあなたとともに〜

ここは相談屋の本部。ソファーに座り紅也はうなだれていた。近くには篝と“影”と呼ばれる少年がいた。

「焰さん・・・元気出してください。必ず助け出せます。妹さんたちも命には別状はないんですし」

心配そうに話しかけるのは影だ。

「いつまでもうじうじしてるんじゃないよ」

暗闇から女の声がした。現れたのは高校生くらいの女の子。

「“氷河”さん・・・それは言いすぎじゃないですか?? 焰さんは・・・」

「だから次勝てばいいだろ?? いつまでも過去見てるんじゃないって俺は言いたい」

「それにしても“姫”をも打ち破る勢力・・・。焰ちゃんを倒すくらい奴ら・・・。厳しい戦いになりますね」

小さな女の子がパソコンを打ちながら言う。

「“空”ターゲットの位置は分かったのか??」

氷河が言う。

「影ちゃんから貰った情報からして大体の位置ですね。でも向かってるところは分かりました」

「それはどこだ・・・」

「焰ちゃん!!」

空が声の主の名前を呼ぶ。焰がゆらりと立ち上がる。傷だらけの体には何十の包帯が巻かれていた。

「奴らは茜をどこに連れて行こうとしているんだ??空」

「東京都中心にあります、桐崎豪邸です」

「あのくそ爺のところか・・・」

紅也は奥歯をかみ締める。目の前で連れて行かれる彼女の姿が眼から離れない。初めての敗北だった。

「近いうち、われわれは桐崎豪邸に突入する」

篝が話し始める。

「そのためには焰・・・貴様の枷をはずすときが来たな・・・」

「枷だと・・・??」

「貴様には話していなかった嘗てのレベル・オーバーの任務・・・」

「あれか・・・」

「あれは・・・5年も前のことだ・・・」

篝の表情が沈んだ。紅也たちは何か重大なものだと感じたいた。

「私がお前に炎術師としての基礎を覚えさせてから、7年がたっていた。その頃はまだ満足な術ができていなかったから拳銃使ってたんだよな。ある日お前がなにやら聖書読みながらぶつぶつ言ってたわけよ」

「そこまでなら覚えている。なんとなくあったから読んでみただけだからな」

「その時だったよ・・・いきなりお前の周りが炎に包まれたのは」

ゴクリと全員がつばを飲み込む。

「私はすぐに仲間を呼んだ。あまりにも大きな力を感じたんでね。その時だったよ、4対の怪物が現れたのは・・・」

「怪物だと・・・??俺は3体の墮天使しか召還できないが・・・」  
「焰・・・そこまでできればすごいと思うぞ・・・俺なんてまだ1体だからな」

「僕なんてまだ何も出せませんよ」

氷河と影が順番に言う。

「それらは一体なんだったんですか??」

空が質問する。篝火が少し溜めてから言う。

「あの4体は・・・神だった」

『!!』

全員の呼吸が止まった瞬間だった。

「神だって・・・??」

紅也がよろよろとソファーに倒れる。まさかの答えに茫然自失状態だ。

「あの時は100人の炎術師を総動員させて封印した。焰の中にな・・・」

「俺の中にだ??」

「それ以外に何か方法はなかったのか??」

「氷河の言うとおりまだ何かあったかもしれませんが、神の力はわれわれを滅ぼすのに十分な力を持っていました」

「まさか・・・」

影が驚く。

「それにその頃の焰はまだ力をコントロールできていなかった。1つの町が焼け野原になったよ。まあ、私たちが住人をすばやく避難させたから犠牲者はいなかったよ」



「そうか・・・」

安どの表情を浮かべる紅也。殺しはしてきたが、罪のない人を殺すことはしたくなかったのだ。

「今回の敵には天使を操るものがある。そいつらを上回るには神を使うしかない」

「だから焰ちゃんの枷をはずすんですね」

空が言う。

「しかし焰はちゃんとコントロールできるのか??」

氷河が心配そうに言うてくる。

「これまで幾度もの戦いを経験してきた焰です。今では相談屋の中で最強と言ってもいいでしょうね」

「俺が??」

「まあ、私には勝てないけれどね」

篝が勝ち誇って様に言う。

「どうやって、枷をはずすんですか??」

影が聞く。

「これからするさ、焰・・・お前には覚悟があるか??」

真剣な表情で聞いてくる篝。

「当然だ」

即答だった。

「よし！！魔方陣を描くぞ！！」

そう言つて篝は懷から筆と墨を出すと円の中に5望星を描く。中に上半身裸に焰が座る。背中にはなにやら術式が浮かんできた。

「あれが枷か・・・」

氷河がつぶやく。

「神を貼り付けし十字架よ今こそ神を解き放て！！神の四肢を貫く杭よ今こそ神を解き放て！！神の自由を奪う鎖よ今こそ神を解き放て！！世界を創造し神々よ今こそ少年に力を！！プロメテウス！！フェニックス！！パニシャー！！マグマハート！！」

ものすごい熱風が吹き上がる。そして基地の天井が破壊された。

「何が起きてるんだ！！」

氷河が炎でドーム上の結界を張る。その中に影や空もいた。

「あれは！！」

目の前に現れたのは4つの影。人間の形をしたプロメテウス・・・愛と幸福をつかさどる神。蛇と人間が混ざった形のパニシャー・・・

殺戮をつかさどる神。鳥の形をしたフェニックス・・・生と死をつかさどる神。ドラゴンの形をしたマグマハート・・・恐怖と絶望をつかさどる神。これらの前に立つのは紅也・・・コードネーム“焰”だった。

「今行くぞ・・・茜!」

戦闘準備は整った・・・。

ここは桐崎豪邸。つれてこられた茜はすぐに服を着替えさせられ、ドレスに着替えさせられた。そしてとある1室につれてこられた。そこにいたのは父親と知らない男2人だった。

「パパ・・・これはどういうことなの??」

茜は不安そうに聞いてみる。

「何を言ってるんだ。この方はお前の婚約者だぞ。九条棟高くじょうむつたかくんだよ」

娘が帰ってきた嬉しさと、ますます自分の力が婚約によって強くなることへの喜びが顔に表れていた。

「棟高と申します。聞いていた以上の美しさだ。こんな美しい人と結婚できるなんて僕はなんて幸せものなんだ」

大きく手を広げて茜を抱きしめた。嫌な感じしかなかった。それでも嫌な顔をすれば悪いと思い作り笑いをした。

「私もあなたのようなすばらしい人と結婚できるなんて幸せです」

口合わせで言う。すると。

「!?!」

無理やりキスしてきたのだった。軽いものだったがいきなりだった。

「うれしいな・・・こんなきれいなこと結婚だなんて」

まだ浮かれている男。向こうでは結婚の手はずが勝手に勧められている。茜にはどうすることもできなかった。ただ助けを待つばかりだった。

（紅也・・・来てくれるよね・・・）

雪が降るクリスマスの夜の空をサンタクロースが来るかどうか見るように見ていた。

「!?!」

突然空が赤くなった。よく見ると何かが飛んでいた。

「あれは??」

「どうしたんだい??ってなんなんだあれは!?!」

茜の言葉に棟高が反応してみるとそこには真っ赤に燃えた鳥が空を飛んでいた。驚いて思わずはやの隅に隠れてしまった。

「どうしたのだ??」

棟高の父親清朗が見てみるとそこにはここに近づいてきた鳥がいた。

「ぎゃあああああ!!」

ドガーアアアアアン!!

窓や壁が破壊された。茜はふわりと宙を舞う感じがした。そして誰かに抱っこされている感じを感じ取り目を開けてみると。

「あ・・・」

そこにいたのは。

「炎を操りし相談屋、ここに約束を守りにきたぞ」

「紅也!!」

目の前には彼女が一番会いたかった人・・・五十嵐紅也・・・  
“焰”  
がいたのだ。

12 クリスマス〜聖夜はあなたとともに〜（後書き）

コメント待ってます!!

### 13 神光臨くクリスマスの聖戦の開戦く（前書き）

いよいよ最後の戦いが始まる・・・。

### 13 神光臨くクリスマスの聖戦の開戦く

「貴様く……どこまで私の計画を邪魔すれば気が済むんだ……」

「苦虫をかんだように顔をゆがめる重喜代。それを紅也は鼻で笑って言う。」

「はん、お前がやることなすことはすべて確認済みなんだよ。しかもそれはすべてやってはいけないものばかり。これを公表されるとお前の権力もがた落ちだな!!」

「おのれく!! 3 忠臣!!」

「くくは!!」

そこに現れたのは若い男・カルマ・神父だった。

「また来たか堕天使が。貴様では天使には勝てん!!」

「きやははは、また血祭りだぜい」

「哀れな子供よ……」

「くくお前らの相手は俺達だ」

そこに現れたのは、篝・氷河・影・空・姫だった。

「みんな!!」



「紅也！！お前はあのくそ爺を叩け！！」

篝が茜の父親をさして言う。

「あいつはわれわれ炎術師を裏切ったものだ！！」

「なに??」

「紅也！！俺達であの神父とブサイクシスターを叩くぜ！！」

氷河が相変わらずの口の悪さで言う。

「このくそアマがー！！ぶっ殺す！！」

「僕達だつてやれるんだ！！」

「援護します！！」

氷河に続いて影と空も戦う。そして姫も。

「紅ちゃん・・・ごめんね。私の力不足で紅ちゃんに辛い思いさせちゃって・・・」

姫は今にも泣きそうだった。

「でも・・・そのお返しとしてこいつらぶっ飛ばすからみんなでパ―ティーしようね！！」

「分かった！！行くぞ茜！！」

「え??分かった!!」

紅也と茜は逃げる重喜代を追いかけた。そして大広間で止まった。

「ここで決着をつけようぜ・・・くそ爺」

「おのれ・・・」

「前に言っただよな・・・道踏み外すぜって」

「・・・」

「お前がなぜ裏切ったのかは知らないが・・・俺はお前に炎罰を与える!!」

「ほざけクソガキ!!出でよ我とともに戦いしものよ!!」

「ぐおおおおおお!!!!」

「なんだあれは!!」

紅也立ちの前に現れたのは・・・。

「龍・・・」

「そうだ!!炎竜王だ!!私は禁忌を犯しこいつの契約に成功した!!そのため名前を変えてこうしてひっそりと生活してきたのだ!!更にこいつらもだ!!」

「マジかよ・・・」

そして現れたのは・・・。

「天使・・・」

白く光り輝く天使だった。2体は紅也を睨みつけていた。

「はっはっは、堕天使しか使えないお前が天使おるか魔王も倒せまい！！」

笑いが止まらない重喜代。しかし紅也は・・・。

「ひやはっははは。これは傑作だ！！こんなすばらしい舞台になるとはおもわなかったぜ。まだまだクリスマスの夜は続け！！」

そう言って紅也は魔法陣を3つ描く。

「さっき見たよな・・・あの炎の鳥を・・・」

紅也が低い声で言う。

「あれのことか??ああ見たさ。突然だったんでびっくりしたがね」

「あれなんだと思う??」

次々と模様を描いていく紅也。低い声で再度問う。

「ただの鳥だろ??燃えている・・・」

少し顔色が変わる重喜代。まさかの答えがよぎったからだ。

「あれはだな・・・俺が昔暴走させたものらしいぜ」

自嘲しながら言う。

「あれはだな・・・フェニックスだ!!」

「な!？」

よろめく重喜代、そして紅也が描いた陣からは新たな光が生まれる。

「出でよ!!我とともに大切なものたちを守りし神々よ!!」

「神だと!!」

ありえないという顔で言う重喜代。そして現れたのは。

「我とともに戦え!!プロメテウス!!パニシャー!!マグマハート!!」

「くっそー!!蹴散らせー!!」

重喜代の声に反応し炎竜王と天使は戦闘に入る。そして神もそれに応戦する。そして・・・。

「俺達も楽しもうじゃねか!!」

「クソガキが!!」

お互いに炎を操り戦い始める。隣では怪物たちの激しい戦闘。こちららは炎を操り戦う炎術師。

「ブラスト・バーン!!」

「インフィルノ!!」

巨大な炎の壁が出来上がる。すでに部屋の中はサウナを越えていた。隅で見ている茜は耐えることができそうでなかった。そこに現れたのは。

「お嬢さま・・・」

たくさんのメイドと執事たちだった。

「お嬢さまがどのようにご決断されても私たちはそれのお力になります」

1人の執事が言う。それに肯定の意思を皆が示す。

「お嬢さまの人生でございます。あなた様が自分で決めた道をお進みください」

メイドの1人が言う。茜の気持ちはもう昔から決まっていた。

「私はこの家を出て行きます!! 皆さんのお力をお貸しください!!」

『分かりました!!』

すぐに支度に入る執事たち。茜は紅也を見つめていた。最後は二人で帰ったのだ。

「勝つてね・・・紅也・・・」

彼女の願いは・・・。

「はあああああ」

「いやあああああ」

2人の叫び声とともに炎が激突する。そして隣では先頭に変化が起きた。

「な！？神が押されている??」

なんと神々が押されていたのだ。まさかの展開に焦る紅也。

「はははっはあ、やはり神は我の味方なり!!」

「くっそー!!」

激しい戦いは続く・・・。

### 13 神光臨〜クリスマスの聖戦の開戦〜（後書き）

コメント・評価待ってます!!

## 14 仲間たちのそれぞれの戦い

その頃簞は・・・。

「なかなかやるねえ・・・ボウヤ」

「そこまで年は若くはないぞ???オバサン」

外では簞が若い男と戦っていた。しかしどうも押され気味である。

「貴様が現炎術師最強なのか???笑ってしまう!!!こんなにも炎術師とは弱くなってしまうたのか!!!」

跪く簞に罵声が浴びせられる。そして。

「天使の力に屈指よ!!!」

しゅぱぱぱ!!!

天使の羽が簞の体に突き刺さった。

「ぐあああああつあつあ」

簞は悶絶する。体中から血が噴き出す。

「ふあはははっは。止めだ!!!」

「止め???」



とたんに空気が変わった。そこには・・・。

「なぜ立っていられる！！先ほど杭によって四肢を射抜いたはずだ！！」

「アゝこれね、こんな痛みなら・・・家族を殺されたときに心の痛みのほうがずっと痛かったよ！！」

「な！！！？？」

「けちらせ！！サラマンドラ！！」

高速で描かれた魔法陣からはトカゲの形をした炎をまとった怪物が現れた。

「久しいね」

サラマンドラを撫でながらつぶやく。すぐにきつと目を睨みに戻す。

「あいつを・・・天使を殺してきな！！」

恐ろしい表情になった。あまりの恐ろしさに思わずたちろぐ。

（ばかな・・・なぜ私が恐怖しなければいけないんだ??）

焦る若い男。それに呼応して天使も弱る。

「まずい！！やつの殺気に飲まれるな！！」

「ぎしゃあああああつああ！！！！」

天子に向かって炎弾を繰り出すサラマンドラ。しかし天使の羽を数本打ち落とすくらいしかできなかった。それでも繰り返し攻撃する。天使も負けじと羽をサラマンドラに突き刺して抗戦。しかしサラマンドラは弱る気配がない。むしろだんだんと天使の羽が消えてくる。

「なんていう防御力だ・・・」

「私はね・・・目の前で大切な家族を殺された・・・。なぜか私は強姦にあっただけで助かった。でも殺された家族は帰ってこなかった。だから私は耐えた。あの悲しみを！！辛さを！！だから私にとって耐えることは取り柄なのよ！！」

ついに羽が安定を失い地面に天使が墜落した。それをサラマンドラが大口あをあけて飲み込んだ。

「ぎゃあああああつああ」

この世の叫びとは思えない声が響く。驚愕する若い男。おそらく初めての敗北なのだろう・・・。

「貴様には弟子たちがお世話になったな」

「ああああ・・・」

「たっぷりとお返ししてやるよ！！」

「ぎゃあああああつああ！！」

「バースト・ハンマー！！」

紅蓮に輝く炎のハンマーが叩き下ろされた。ぐしゃりと音がしたが、  
簀は見向きもせずにサラマンドラにキスし、魔法陣を消す。

「あの子なら神の扱い方に気づくでしょうね」

心の中でつぶやく。だって私の大切な教え子だから……。

ここは神父と戦っている姫・影だ。

「哀れな子供よ……神の裁きで改心せよ」

次々と振ってくる雷に何とか炎で防ぎながら戦う影とその隙に拳銃で攻撃する姫がいた。影は炎を出せるくらいしか力があらず、むしろ炎による幻覚を見せ敵にまぎれるという得意技を持っているに過ぎなかった。更に姫は炎術師でないため、拳銃に頼るしかなかった。しかもまったく防御ができないので守ってもらえない。

「神を殺しし十字架……」

どがががあああん!!

宙から無数の十字架が落ちてきた。それを炎で防ごうとしたがあまりの力に2人とも押しつぶされた。

「あががああああ」

「ぎゃああああああ」

悲鳴を上げる二人。骨がかなり持っていかれただろう。

「あまり聞きたくありませんな・・・子供の悲鳴とは・・・」

泣きそうな声で言っているが顔は無表情。

「く・・・そお・・・」

痛みに耐えながら影が立ち上がる。小さな体からは血が流れていた。

「お前なんか・・・焰さんの夢を壊させるか!!」

再び手に炎が出現した。しかし・・・。

「十字架・・・」

ばたんと目の前から倒れてきた。

「くっそーーおおおおおお」

炎の出力を最大にして防ぐ。

「十字架・・・」

容赦なく後ろからも倒れてくる・・・。

（僕には無理なのか・・・??）

しかし一向に倒れてこない。そこには・・・。

「姫さん!!」

姫が体を張って防いでいたのだった。炎術師でもない生身の女が神の力を防いでいた。

「神に抗うか・・・人間・・・」

「生憎だが僕たちは無宗教だからね」

「そうそう、神とかはいてもどれが正しいとかは関係ない」

「神に抗いし人間・・・」

「「紅也の夢を守る!!」」

「人間・・・」

そして影は今ならいけると直感した。自分の中に何かが生まれたことを感じた。

「これが僕の力だ!!」

拳に炎をまとわせる。青白い炎だ。

「聖火・・・神を焼く炎・・・」

顔が崩れる神父・・・中からは光り輝く羽を生やしたものが出てきた。

「あれは・・・」

「天使だね・・・」

拳を構えたまま止まる影。拳銃を構える姫。それらと退治するのは天使。

「人間・・・神に背きし存在・・・クロス」

「勝手に玩具扱いするな!!」

影は走り出す。しかしこのままでは回避されてしまう。一箇所にとどめなければ・・・。

「やるしかないわね・・・」

姫は拳銃を構え近くにあつた本棚などを固定していたボルトをはずし、タックルで天使のいる方向へ本棚を倒す。それを回避した天使だが、目の前には・・・。

「これで終わりだ・・・天使が!!」

炎をまとった拳が天使の頬にジャストミートした。ぶっ飛んだ天使は倒れて光の粒子となった。

「勝った・・・」

「勝った??」

そのままへ垂れ込んでしまう二人。相当疲れたのだろう。立ち上がることもしない。

「私インドア派だから明日は筋肉痛ね」

「あははは、僕はこれから前線で戦わなければ行けないですかね？」

「あんたの力じゃまだ焔みたいには戦えないわ」

「あの人は天才ですから・・・」

「あいつの強さは見えてるものだけじゃないの・・・」

「え??」

「もつと大切なものをあいつは持つてる・・・」

ここはカルマと氷河・空が戦っていた。十字架を剣に変えたカルマと炎の剣を操る氷河と遠距離から炎弾を着実に当てる空。完全に押していた。

「このクソガキどもー!!」

完全に切れているカルマ。完全に清楚な女性という皮を破ってしまっている。

「おらおらどうしたシスターさんよ!!」

「このまま行ってしまうでしょう」

剣を振るう氷河。計算づくされた確実な援護の空。しかしこのくらいで負ける3忠臣ではない。

「このやろおおおおおお」

カルマの体が崩れた・・・。

「何なの??」

「びつくりです」

驚く2人の前に現れたのはまたもや天使だった。天使は2人に向かって羽を飛ばしてくる。

ひゅばばばばばば!!

それを炎で防御する。しかし一向に収まらない攻撃。反撃ができない。

「くそ!!何か策はないのか??」

「うゝん、いい策がありません」

防戦一方の2人。じりじりと交代してる。

「見つけました」

「本当か??」

ポツリと光を提示した空と喜ぶ氷河。

「あなたが怪物を出すのです」

「マジか・・・」



「それしかないです。僕が何とか防ぎますのであなたは早く魔法陣を」

「チクシヨウ！！分かったよ！！」

急いで描き始める氷河と耐える空。激しさを増す竜巻と羽による攻撃。防ぎきれずに切り傷を負う空。それでも耐える。決定的な切り札があること思い出したから。そして。

「できた！！」

しかしその瞬間……。

ずばばばつばばば！！

体中に羽を突き刺した空が倒れる。血を吐きながらつぶやく……。

「うー」

「うおおおおおおお」

氷河は叫んだ。仲間が傷ついたから。そして自分は救われたから。

「だからお前を倒す！！出でよ！！神に仕えし墮天使……オフア二ス！！」

そこに現れたのは6枚の羽を持った墮天使だった。天使は攻撃を開始する。しかしそれを掻い潜り突き出た爪と手で天使を突き刺す。

「ぎiiiiiiiiiiii」

叫び声とともに粒子となって消えた。そして倒れた空の元へ急ぐ。

「おい！！倒したぞ！！」

「よくやってくれましたね」

「まったく・・・あれはあまり使いたくないんだ・・・」

「ですよーあれは女の子過ぎますからねー。男勝りな氷河ちゃんには似合わないですよー」

「うつうつうつ、そんなこと言うな」

顔を真っ赤にしながらばかばかと叩く。

「大丈夫か??」

体中に傷を負っている空。小さいからといっても女の子。服が所々切れて肌が見えていた。

「大丈夫ですよー、これも作戦のうちです。これで焰ちゃんを・・・ぐふふふ」

「なんか怖いぞお前・・・」

そんな会話をしながら大広間を目指した。ほかの2組も同じだった。

#### 14 仲間たちのそれぞれの戦い（後書き）

コメント・評価待ってます!!

15 ファイナルバトル〜聖夜はあなたとともに〜（前書き）

最終バトル・・・。

## 15 ファイナルバトル、聖夜はあなたとともに

そして大広間……。

「「はぁ……はぁ……」」

2人は肩で息をしていた。そしてついに神が残りマグマハートのみとなった……。

「ふはははっは。これが私の力だ！！何が炎罰だ！！貴様に力はないのだ！！それを身をもった感じただろう！！」

完膚なきまでに叩きのめされた紅也……。

（強すぎる……俺は……勝てないのか？？また負けるのか？？  
負ければ茜はまた連れ戻される……。嫌だ嫌だ嫌だ……）

「たて焰！！」

そこには篝がいた。

「「たて紅也！！」」

影と姫がいた。

「「たつて戦え紅也！！」」

氷河と空がいた。

「みんな……」

紅也はみんなが約束を守ってくれたことを嬉しく思っていた。

「まさか……3忠臣が敗れるなんて……天使が負けるはずが！」

「その天使が人間に負けたんだ……」

篝が言う。

「紅也……私たちは約束を守った。後はお前だけだ……。あそこで辛いのを我慢してお前のことを待っている子だっているのだぞ??妹たちだつて今は起きているかも知らないぞ??お前は守るといったんだろ??だつたら戦え!!私の弟子なら戦え!!守りたいたものがいるなら戦え!!紅也!!」

「うおおおおおおお!!マグマハートおおおおお!!」

「ぐおおおおおおお!!」

紅也の咆哮に呼応してマグマハートもそれに続く。

「くられ!!これが神の力!!」

マグマハートが口を開ける……。

「ヴォルケーノ・インフィアマート!!」

赤い閃光が天使と炎竜王を切断した。

「ぎいいいいいい」

「うおおおおおお」

天使は粒子となり、炎竜王は炎となって消えた・・・。

「まさか・・・私が負けるはずが・・・」

「俺とお前には決定的な違いがある・・・」

「なんだと・・・??」

ゆつくりと近づきながら紅也は言う。

「俺には守りたいという存在がある・・・。心からそう思える存在があるんだ!!」

紅也は再び腕に炎をまとわせる。そして・・・。

「お前はその大切な存在に汚い手で触れたんだ!!代償はきっちり払わせてもらうぜえええ!!」

「ぎゃあああああつあああ」

炎で巨大化した紅也の腕が迫る。重喜代にはもう防ぐ術がなかった・・・。

「炎罰だっ!!バーニング・ゴッド・ストライク!!」

どがあああつあああ!!

顔面にジャストミートし吹っ飛ぶ。そしてそのまま気絶してしまっ  
た。

「勝った・・・??」

弛緩していくのが分かる。後ろから茜が走ってくる。

「紅也!!大丈夫??」

「ああ、少し疲れたがな・・・」

よかったと微笑む茜。そのとき中に数人の炎術師が入ってきて重喜  
代を捕らえていた。

「パパはどうなるんですか??」

心配そうに聞く茜。

「心配することはないさ。術式で炎竜王をはがして、ばいさ」

どっと笑い声上がる。そして・・・。

「まだクリスマスの夜だな・・・」

紅也は茜の手をとって外に出る。そこにはフェニックスが残ってい  
た。

「大きいね」



「そうだろ?? 乗ってみる。熱くはないから」

恐る恐る茜はフェニックスに乗る。フェニックスも神なのに女性を乗せるのは初めてなのか慌てている。

「残り5分間、恋人同士の楽しいクリスマスを過ごしますか」

「うん」

その日1番の笑顔を暮れた茜。2人は5分間クリスマスの空をフェニックスで飛行した。サンタがいなか探しながら茜はまるで子供だった。その後かがりが用意した店で手当てをした妹たちとパーティーをした。その時ホワイトスノーが降りそそいだ。

「紅也・・・」

「んあ??」

赤い顔をして紅也を見つめる茜。そして。

「メリークリスマス!! 助けてくれてありがとう!! 外の世界をくれたサンタさん」

笑顔の茜。それに対して紅也も笑顔を作り言う。

「どういたしまして茜・・・。メリークリスマス」

そして2人はキスをした・・・。大きなプレゼントをくれたサンタと貰った子供が・・・。

## 15 ファイナルバトル〜聖夜はあなたとともに〜（後書き）

次回最終回です。

コメント・評価待ってます！！

## 16 歩こう光り輝くこの道を

あの事件からもう数年がたった。俺は今茜とともに庭付きの大きな家を購入した。俺は今五十嵐ではなく桐崎紅也として今まで通りの相談屋を営んでいる。子供もできた。男の子と女の子。茜樹こいつと紅香と名づけた。

茜のお父さん・・・重喜代さんから許可を貰うのに相当通ったのを覚えている。しかし最後は俺に根負けして認めてくれたのだ。結婚式には見つけ出した両親も招待した。その時泣きながら謝罪してくれた。でも父親は一発殴っておいた。まだ二人で借金生活しているらしいが足を洗って今は返済に努めているらしい。

「おとうさん」

「どうした??」

「どうしたじゃないよ??」

「今日は遊園地つれてってくれるって約束でしょ??」

「あゝそうだったな、ごめんごめん忘れてたよ」

「「ぶ」お父さんのバカ」

「分かった今から連れて行くから支度しなさい」

「「はい」」

素直に支度しに行くとする違いで妻が入ってきた・・・茜だ。

「まったく紅也は最近仕事だからって子供たちをほったからしだよ」

「それに関してはなにも言えない」

「しかもその埋め合わせの約束も忘れちゃうなんて」

「だからごめんって」

俺は土下座をして謝る。今ではすっかり立場が逆になってるかな？

「おとうさん」「」

「それじゃあ行くか・・・」

俺は立ち上がり茜に手を差し出す。

「ええ・・・行きましょう」

その手をしっかりとつかむ。俺は絶対にこの手を離さない・・・。

そう・・・あの時誓ったみたく命に代えてでも・・・。

「歩こう光り輝くこの道を」

俺達は歩いていくこの道を・・・いつまでも一緒に・・・。

完

## 16 歩こう光り輝くこの道を（後書き）

如何でしたでしょうか？

最後にコメントをいただければ今後の執筆にいかせると思いますのでよろしく願います。

評価もいただけると幸いです。

今後も泉海斗をよろしく願います！！

では、また明日！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4169n/>

---

こちら炎を操りし相談屋

2010年10月18日19時29分発行